尾崎喜八資料

第 6 号

特集 音楽についての対談とエッセイ

イメージ／尾崎喜八――――2

山岳文学のひとつの逸話／川崎精雄――――3

忘れ得ぬ牧場／尾崎喜八――――7

研究と資料――――10

「現代ギター」対談／新アスレチック(二)／詩人と音楽／音楽(一)／バッハとシュッツ／バッハへの思い／オルゴール／ピアノに寄せて／私の青春とともに暮らしたレコード

*

尾崎喜八書誌――初出目録・補遺(一)――――26

嘉納忠明

*

富士見町の尾崎喜八記念館(仮称)計画の進行状況について／石黒敦彦――――28

研究会だより――――30

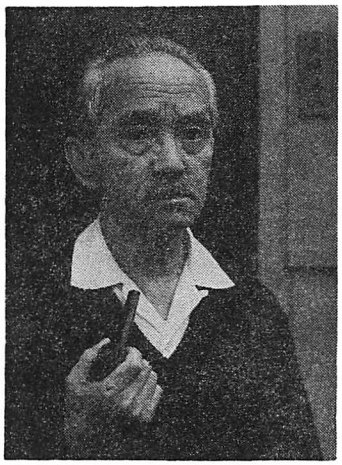
この一年のできごと／その他――――32

*

表紙題字／草野心平

尾崎喜八研究会

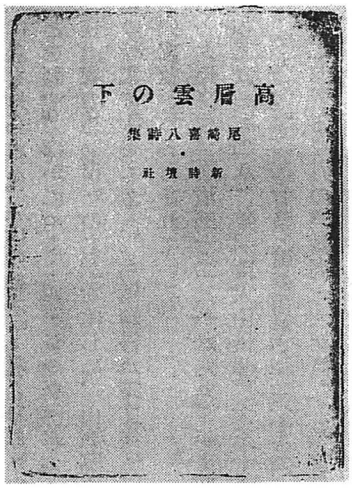
1990年2月



イメージ

平野を見おろす山の端の
宙にかたむいたあんな高みに
こつねんと秋の湖の氷の杯。
私の黄いろい大きな周囲に霧がたちこめ、
眼の前の濡れた小枝で一羽の美しい山雀が
青いはしばみの皮を猛々しく引き裂き、
からまつ林のてっぺんを渡る栗鼠が
ぼろぼろと何か毬果の屑をこぼした。
——おびただしい履歴の奥の鮮明な一瞬よ！
しかも私の赤城がもう塵労の地平に消える。

（「文芸春秋」昭和三十三年九月号）



玉川上野毛，昭和33年頃（撮影者不詳）

山岳文学のひとつの逸話

尾崎喜八の詩を使った大島亮吉の一文について

川　崎　精　雄

昭和四十九（一九七四）年六月、当時刊行されていた創文社の『アルプ』一九六号は、「特集　尾崎喜八」という内容で、私は「井荻時代の尾崎喜八氏」と題した拙文を書いているが、そのなかに次のような一節がある。

昭和七年に神津牧場に行かれた尾崎さんは、そこで意外なことを発見された。若い頃のご自分の詩〝野の搾乳場〟全詞が、或る人の神津牧場に関する随筆の中に使われていることだった。

それで、尾崎さんはその随筆の載っている書籍を書棚から放逐されたそうである。わたしは帰宅すると、すぐにその詩と文を対照してみた。若い詩人が推敲を重ねた五十七行の珠玉の言葉は、ことごとく文にあった。朝日を浴びた並木の枯枝にも、ほのぐらいむんむんする牛舎にも、である。一つだけあげてみると、詩のすばらしい寒さよ！　吐く息が虹になる凍てついた路が下駄の下できちきちいふは「すばらしい寒さだ。吐く息は虹になるくらひ。凍りついた路が、重たい鋲靴の下できちきちいふ」であった。わたしは尾崎さんの怒りが理解できた。

詩集『高層雲の下』は大正十三年刊だから、収録されたこの詩は、それ以前の作であろう。この詩集の出た一年ぐらい後に、その随筆は書かれたようである。

また、私の文のあとに、友人渡辺公平君が「ウェストン祭と尾崎さん」の一文を載せていて、最後の一節が次のような内容である。

五千尺でもいろんな話を伺ったが、ただ一つ、もっと詳しく聞いておけばよかったということがある。なんかのはずみで出た話だが、尾崎さんが大島亮吉氏の作品（適当な表現ではないが）に不信感を抱いていたことである。登山者の間では最高級の文章として評価の定着していた大島さんの「荒船と神津牧場附近」などの作品名が出たとき、僕はその意外性に驚いた。そろそろ宿を出る時間がせまっていたような事情もあって、それから先を詳しくお質ねすることができなかった。山岳文学にとっては看過すことのできないテーマだと思うだけに惜しいことをしたと悔やまれるのである。

いきなりこんな文を並べると、人は首をかしげると思うが、これは私が、渡辺（以下すべて敬称略す）の言う〝山岳文学にとっては看過すことのできないテーマ〟について語ろうとするプロローグである。しかしこれだけでは読む人、特に若い人たちにはわかりにくいので、標題にある尾崎喜八と大島亮吉のふたり、それに登載誌『アルプ』の説明をしておく。

尾崎喜八、明治二十五（一八九二）年～昭和四十九（一九七四）年、詩人。山は、昭和三、四年ごろ『一日二日山の旅』『静かなる山の旅』などの著者、低山趣味の提唱者で有名な河田楨（みさお）の手ほどきで、静観派的登山を開始、散文「たてしなの歌」で、一躍、山岳界

に名を知られる。『山の絵本』『雲と草原』などを著す。ほかにエミール・ジャヴェル『一登山家の思ひ出』の名訳をはじめ、山旅関係の詩集や訳著も多い。『尾崎喜八詩文集』が創文社から刊行されている。

大島亮吉、明治三十二（一八九九）年～昭和三（一九二八）年、慶大山岳部。大正十一（一九二二）年三月の槍ガ岳や、大正十三（一九二四）年三月の奥穂高・北穂高など積雪期初登の記録をもつ。反面、静かな山や峠を愛し、すぐれた文章を書いた山男。昭和三（一九二八）年三月、前穂の北尾根で墜死した。遺著『山　研究と随想』は、『先蹤者』とともに名著とされている。『大島亮吉全集』も出ている。

『アルプ』は尾崎喜八、串田孫一ほかの発案で、創文社から昭和三十三（一九五八）年以降刊行された月刊誌である。高峻山岳の登攀記とか技術面の向上とかいったものを避け、誌名の示すとおり高原、山麓、山峡などの雰囲気を盛った静観派的随筆雑誌で、現在の『山と溪谷』などとはだいぶ違った傾向をもっていた。

『アルプ』は、昭和五十八（一九八三）年に第三〇〇号をもって意図的に終刊としたが、これはその使命を終えたというのが理由で、このことは今回の『山と溪谷』の特集企画にも関連があると思うので、本文の終わりですこしふれてみよう。

昭和十一（一九三六）年、私たちは十五、六人で尾崎を中心とした小さな山のグループを作った。静かな山歩きをしよう、というのが目的で、会の名は、尾崎が万葉集のなかの〝いざ児ども　大和へ早く　白菅の真野の榛原手折りて行かむ〟（高市連黒人）から採ったと思われる「白菅会」とした。私たちは山行のかたわら尾崎をよく訪ね、尾崎も私宅へ来てくれたりした。

ある夏の夕ぐれに、私はひとりで尾崎家を訪れたことがある。詩人は「高原の晩夏に寄せる歌」と題した二六行の詩ができあがったばかりのときだったので上機嫌だった。私にその詩を読ませたり、色紙に書いてくれたり、オルガンに寄って得意の美声で、好きな「ロッホ・ローモント」を歌ったりした。

そして話のなりゆきとして、山の話と本の話が出たとき、詩人の眼は光った。それには次のような話が続いて出た。

尾崎が初めて神津牧場へ行ったのは、昭和七（一九三二）年であった。そこで自分の詩が文章に変わって、案内板か何かに記されているのに遭遇する。

そのときの驚きを尾崎は、次のように話してくれた。

「神津牧場へたどり着いて、やれやれと思ってふと前を見ると、そこに〝野の搾乳場〟がそのまま文になって、突立っていたのでびっくりし、しばらくあ然と立っていたよ」

それは牧場などによく見る案内板の類であったかもしれない。また牧場の事務室とか部屋に置かれていた印刷物にも、その文章が載っていたかもしれない。いずれにしても、それらの末尾に大島亮吉の名があったことは間違いなかろう。

尾崎は自分の書棚に『山　研究と随想』を持っていたが、そのなかの「荒船と神津牧場附近」は読んでいなかったとみえる。神津牧場から帰って、それを読み、あまりにも自分の詩が盗用されているのに腹が立ち、『山――』を紙屑と一緒に処分したという。

私はこれを聞いて、帰宅してから、手許にある尾崎の詩集『高層雲の下』と、大島の『山――』を書棚から引っ張り出し、〝野の搾乳場〟と「荒船と神津牧場附近」のなかの〝牧場の乳搾り場〟とを対比してみた。

本来ならば、ここに詩の全部（五七行）と文章の全部を書き並べるとよいのだが、大変長くなるので、詩も文も原型が損なわれるのを承知で、詩がそのまま文に使われている部分だけを併記してみる。

ちなみに〝野の搾乳場〟は、『尾崎喜八詩文集』の1に収録されているので『山――』と比べて読んでいただきたい。

すなわち次のようなかたちである。

（詩の初め）　野の搾乳場？　それは遙かむかふにある、

（文の初め）　この山の牧場の乳搾り場はちやうど、牧場のいろいろの建物の――まんなかに牛舎と並んである。

（詩）　ぼんやりまどろむ冬の朝の空の下、――そこへ乳を飲みにゆくのは悦ばしく、健康なことだ。

(文)　そこへ朝むつくりと起きて—搾りたての牛乳を飲ませて貰ひにゆくのは、またおそろしく自分にとって悦ばしい、そうして健康なことなんだ。
(詩)　すばらしい寒さよ！　吐く息が虹になる。
凍てついた路が下駄の下できちきちいふ。
(文)　この牧場の朝はすばらしい寒さだ。吐く息は虹になるくらひ。凍りついた路が、重たい鋲靴の下できちきちいふ。
(詩)　畑は霜にさんらんと輝き、
野菜は緑玉、野葡萄は血紅石。
そして並木のりつぱな枯枝では、
朝日を浴びて、
焦茶の胸のじやうびたきが
(文)　小屋の石屋根のうへには、霜がしろくきらきらとかがやいてゐる。りつぱな落葉松のすらりと立つた並木の枯枝は、まつかな朝日を浴びてゐる。
(詩)　緑のきはだつ樫の木の間に煙突の柔かな煙が見える。
牛舎の低い屋根が見え、家畜特有の匂がする。
(文)　牛酪製造場の煙突からはすつと柔かに煙りが流れて消えてゆく。牛舎の間の幅広い通路にはいると、もう家畜特有の匂ひがする。
(詩)　犬の吠え声、牧場の女の話し声、それにまじつて
人なつこい、甘へた、彼等のモウが聴こゑる。
(文)　快活な牧夫たちの話し声、遠くで吠えるあの羊飼ひ犬のなき声などとうちまじつて——窓からは、人なつこい、甘えたやうな、乳牛たちのもうが聴える。
(詩)　乳屋の中庭は散らかつた藁も水たまりも凍つてゐる。
(文)　牛舎の間の中庭も、そこいらに散らかつた寝藁くづも、水たまりもみな凍つてゐる。
(詩)　ほのぐらい、むんむんする牛舎には、
栗いろ、白、黒、ぶち、
すべて小山のやうな、多産の姫達が、
でつぱつた臀の先にぼんやり当る朝日をうけて、
立つたり、前足を折つたり、座はつたり、反芻し、涎をながし、生温かい息を濛々と吐いてゐる。
(文)　ほのぐらひ、むんむんと鼻をつくやうな牛舎特有の—匂ひのする内部には、栗いろ、白、黒、ぶちなど、すべて小山のやうなゼルシイ種の多産な—獣たちが、でつぱつた臀の先にぼんやりあたる—朝日をうけて、立つたり、前足を折つたり、座つたり、反芻したり、涎をながしたり、生温かい呼吸をもうもうと吐いてゐる。
(詩)　甘つたるい臭気の中を蠅がぶんぶん飛びまはる。
(文)　甘つたるい臭気の中を、こんな寒さにも蠅がぶんぶん飛びまわつてゐる。
(詩)　中庭の台の上、厚手ガラスの大コップへ
なみなみと注いで出される牛乳の
なんといふ新鮮、なんといふ芳醇。
(文)　厚手のガラスの大コップへ一杯になみなみと注いでくれた牛乳の、なんといふ新鮮さ、なんといふ芳醇さ、
(詩)　あゝ、美しい、清らかな武蔵野の冬の朝の
芳醇甘美な一ぱいの牛乳！
(文)　ああ、美しい、きよらかなこの信濃境いの山上牧場の春浅い朝に飲む、この芳醇甘美な一ぱいの牛乳！
(詩の末尾)　そこへ乳を飲みにゆくのはじつに悦ばしい健康なことだ。
(文の末尾)　そこへ乳をのみにゆくことだけでも、それはじつに私にとつて悦ばしい健康なことだ。

見られるとおりである。詩の構成順序を、そのまま文章の構成順序に当てはめているし、臀という字を使っていることや、坐る、と書くべきところを、詩のとおり間違えて、座る、と書いている。当時の表記では、「坐る」は動詞に、「座」は名詞に使われた。

これではもはや無断借用などとは言えず、盗用と言うべきである。そればかりでなく、ほかにもこうした部分がありはしないか、と勘ぐられるおそれもあろう。

たとえば、大島には「十文字峠」という、村人に峠で出会ったときの名文がある。

〃——背中の病児は熱にうなされてたえず低い呻きをあげていた。まさに峠は紅葉のま盛

りの時だった。親父は真紅に色づいた楓の小枝を一本折りとって、それを片手でたえず背中の児の眼の前に振りかざしてあやしながら――〃

という情感のあふれた場面である。しかし前記のようなことをすると、フィクションかもしれないし、よそから借りてきたかもしれない、と思う人なきにしもあらずである。

ここで私は、自分がこの文を書くに到った心情を述べておきたい。

尾崎から真相を聞かされたとき、これは確かに傾聴に価することだと思った。尾崎は、私以外の人には話していないようで、渡辺も聞いていない。私はこれを自分だけにしまっておこうかと思った。

プロローグの私の文を読まれるとわかるとおり、ある人の神津牧場に関する随筆、と書いているだけで、大島の名は出していない。ひとしく山を好む者として、大島は先輩格にあたる人だから、その名をあげたくなかった。

ところが、私の文のあとに出てくる渡辺の文は、内容のなんたるかはわからぬままに、大島の名が出てくる。つまりこの号を読んだ人は、おぼろげながら事態を知ったはずである。さらに渡辺は右の文をその著『山は満員』(一九七五年　若溪堂刊)に収め、私も右の文を拙著『山を見る日』(一九七七年　若溪堂刊)に収めたから、いく人か読んでくださる方もあるであろう。

そんな事情のなかで、書こうか書くまいか、書くならこの雑誌と思った『アルプ』は終刊となり、渡辺も世を去った。ところが最近、ある岳友から「君は真相を知っているらしいから、書いたほうがよい」と言われ、渡辺の言った、山岳文学にとって看過し得ない事柄、にまだ関心をもっている人があることを知った。

尾崎の没後に、遺族の人たち、詩友、岳友、生前没後の愛読者などで結成した「尾崎喜八研究会」がある。毎年、尾崎の忌の二月に、蠟梅忌なる集まりをもつ。会報には発掘された未知の尾崎の研究資料が載る。串田孫一、大森久雄、山口耀久、三宅修、創文社の大洞正典そのほか山関係の人々が出席する。亡くなった詩人田中冬二もかつて出席し、私は一緒に帰ったことがある。尾崎と大島にまつわる話を、ここに記すのもあながち無駄ではあるまい。

山男の大島はなぜこんなあやまちを犯したのだろうか。彼にとって惜しいことに大きなマイナスで、魔がさしたとしか言いようがない。次のような推察ができる。

尾崎の詩集は、第一『空と樹木』(大正十一年)、第二『高層雲の下』(大正十三年)、第三『曠野の火』(昭和二年)と出ているが、それらは田園生活の美しさは謳ってあっても、旅行とか登山とかの話はひとつもない。つまりそのころの尾崎は山にはまったく無縁の人だったし、新進ではあっても、後日の名声に比すべくなかったのは当然である。

大島は尾崎の詩を発表誌か詩集『高層雲の下』で見て、おおいに気に入った。そしてこれを山の文章に転用した。山の本だから尾崎の眼にはふれまいと考えたにちがいない。同時に、山の本を読む人たちは、新進の平地の詩を読むことはあるまい、と考えた。こうして大島は大正十四(一九二五)年に「荒船と神津牧場附近」を書き、昭和三(一九二八)年に前穂の北尾根四峰で墜死した。

なお『高層雲の下』に収められた〃野の搾乳場〃は、前記詩集のなかでも、その気分のよく出た佳作である。

ところがその後になって、大島のまったく予測しなかった事情が起きた。山に全然縁のなかった尾崎は、二歳年上の河田楨の好リードで山のよさを知り、昭和五(一九三〇)年には、初めての紀行「新年の御岳・大岳」を書く。そして以後は水を得た魚のように、山のすぐれた紀行や詩を発表することになる。田園詩人尾崎が山の世界に進出したために、尾崎と大島の書いたものは、ひとしく山の愛好者の眼にふれることになった。尾崎も大島のものを読むだろうし、いつかは表に出ることであった。

また、壮年の尾崎が神津牧場へ行くようになったのは、不思議でもなんでもない。それを考えなかったのは大島の迂闊であった、と言っては酷であろうか。

これで私の書くべきことは終わったが、もうひとつ忘れてはならないことがある。前に述べたとおり、尾崎はこのことを、私に話し

たほかは、だれにも話してなかったようだ。文章を使ってもよいし、講演のおりにでも、それとなくほかに告げる方法はいくらでもできた人である。それをしなかったのは潔癖な性質がそうさせなかったのかもしれないが、ずいぶん堪忍のいることだったろうと、改めて敬服しないではいられない。

そして以後二十数年を経て、尾崎も齢六十五歳になった頃、やっと雑誌『旅』に――ただ書物にはそれぞれいくらかの永遠があるものだとすれば、後の誤解を防ぐため、また私の「名誉」を護るため、進まぬながらも、こんな事を書いて置かなくてはならない――として三十数行をさき、その折の心境を書いているのみである。

いずれにしろ、私の書いたものは、ありのままではあるが、少しばかり大島に気の毒なことをした感がないでもない。彼にもこんな一面があったということで、判断は読者に委ねたいと思う。

〔編集部より〕

前号でお知らせしましたように、川崎氏の本稿は、「山と溪谷」一九八九年二月号に掲載されたものですが、その後、嘉納忠明氏の調査によって、喜八が「旅」に書いた文章が発掘されました。そこでそれを併せて掲載し、川崎氏にも若干の加筆をお願いしました。なお、「山と溪谷」に載せられた分で、「アルプ」についての言及を若干省略させていただいた事を申し添えておきます。

参考資料

忘れ得ぬ牧場

――戸隠と神津――

尾崎喜八

「牧」という字と「場」という字とをならべて、これを「ぼくじょう」と読むのと「まきば」と読むのとでは、語からうける感じに微妙なちがいがあるように思われる。その青草の広がりに立てば同じように見える放牧地でも、「ぼくじょう」というと近代的合理的な経営、施設整頓などの空気が感じられ、「まきば」の語感からは柵なども破れたり朽ちたりして、他の地類との境界もはっきりしないような、一層自然の草原にちかい風景のイメージが生まれるような気がする。

一般に「ぼくじょう」には牝牛や緬羊の洋画的な雰囲気があり、「まきば」には四、五頭の馬を点景とした日本画風のおもむきがある。

しかし又そうもいいきれない一例として、セガンティーニの絵によく出て来るアルプスの牧場があるが、これなどは風に吹きたわめられた白樺や、頸に小さい鐘をつけた牝牛や緬羊の群にもかかわらず、やはり「まきば」というほうが適切らしくもあれば情趣もある。

私の詩に「春の牧場」というのがあって、この詩を好きな人達がよく「春のぼくじょう」と読むが、詩の舞台から言ってもその情緒から言っても、この場合「春のまきば」と読んでくれるほうが作者の意図にかなうのである。しかし牧場という字の上に何か固有名詞か抽象的な名詞でもつけば、――たとえば「三里塚牧場」とか「西風牧場」とでもなれば、――これはもちろん音読みにしなくてはなるまい。

結局は習慣や個人的な趣味の問題であろうが、とにかく一律に片づけられないところに、音読みと訓読みとの双方が許されるこの「牧場」という字のニューアンスがあるというべきだろう。

ただしこれから私の書く「牧場」の文字は、すべて「ぼくじょう」と読まれることを希望する。なぜならば、彼等はすでにそういう名で呼ばれているのだから。たとえ青草ぼうぼうの、柵も何もない山間の小盆地でも、また其処に一頭の牛、一匹の馬の姿さえ現われない廃園のような広がりでも。

すべては遠い昔になる。あいだに戦争のはさまった二十幾年。時空の厚い霞をへだてて若かった日の山旅からいくつかの牧場の思い出がひびいて来る。それを掬って手に取ってみよう。歌の翼はかつてのうぶな輝きをうしない、その音色にも往年のみずみずしさはな

いだろうが、再建される断片に生涯の夕日の濃い反映があるかも知れない。……

二度目の戸隠と妙高高原。またもや恵まれた快晴の秋だった。

私は先年果たさなかった戸隠登山をこころみて、八方睨みの嶮から一不動へと鋸の歯のように鋭い起伏の連続した集塊岩の嶺線を渡って、やがて東へ一直線の急坂を、広々と眼下にひらけた草原さして追われるように降って行った。

さわやかに色づいた草もみじの原と、金や朱やあかがね色に燃える林。その間に北国の秋の空を冷めたくちりばめている湿地や小川。其処が地図にも出ている牧場だった。

晩い季節のためか放牧のけものは何処にも見えず、時おり林の奥にけたたましい叫びを響かせる赤啄木鳥のほかには、生きている者といったら全く私一人だった。振り返ればのしかかるような戸隠のすさまじい長壁、前は鳥居川の深いはざまを境にして、左に黒姫山の大円錐体と右に飯縄山の厖大な山容。そしてその三つの死火山にふかぶかと囲まれた静寂の天地に秋風が満ち、午後の日光がなごやかにみなぎって、疲れ果てた私が好きな処へ身を投げ出すのに任せるのだった。

私は草の上にあおむけに寝てぼんやりと空を見ていた。気力も体力も消耗してまとまった思考もなければこれという欲望もなかった。ただ先程までの戸隠の危険な個所の映像がきれぎれに脳裡に現われてはまた消えた。案内人もなければ道連れもなしに、たった一人であんな処を通過していた自分が、何か別の世界の人間か非人格的な存在のように思われた。しかしそれもまたどうでもよかった。そんな事を考えるのさえ物倦かった。オーステルリッツの戦場に倒れて空を見ている、あの「戦争と平和」の若いアンドレエ公爵の心境に通じる幾らかのものが其処にはあった。率直に言えば登山という行為に何か重要な意味を認めようとするその事が、私に嘔き気を感じさせた。たった今自分の果たして来たような事がそもそも何だと言うのだろう。恐怖の克服とその勝利感。それは一種のナルチシズムに過ぎないのではなかろうか。とにかく、私の人生の大道がそんな処にあるはずはない。ああ芸術！　創造をとおしてのみ真に我が物となる美と喜び！　私はそれに帰るのだ。そうだ、あしたは真直ぐに其処へ帰ろう……。

しかしやがて幾らかの食糧をとり、飲物を飲んで元気が恢復すると、現実はふたたびしっかりと私をとらえた。そして私が人生を濶歩して行くためには、このような体験もまた必ずしも無駄ではないように思われて来た。いや、私がこれを欲するのは必然の要求の一部だという確信さえ戻って来た。私ははっきりと覚めた心で周囲の風景を見なおした。太陽が傾いて陰影の多くなったこの別天地は、もっとも深みのある絢爛にうずもれていた。私は目にうつるすべてをしっかりと記憶に刻みつけた。そして中社への道へ出た時ふりかえると、風雨に白けた太い門柱の大きな板に、黒姫山の大円錐体を背景にして、「戸隠牧場」と雄渾な文字で大書してあるのに気がついた。

上信国境の神津牧場。その名は広く知れわたって、およそ近代的な牧場風景にあこがれを持つ人ならば、大抵一度は其処を訪れたであろうし、また現に訪れてもいるだろう。

私も前後三度行った。二度は一人で、一度は十人ちかい一行と。しかし行くたびごとに少しずつでもその雰囲気に変化が感じられたから、二十年もたった今ではもうだいぶ様子が変ったろう。

毎年の春や秋、天気がきまって、気楽な山登りや、高原あるきに心がうごかされるころになると、どんなに変ったか、一度行ってこの眼で見て来たい、と思いながら、つい、いまだに実行の折を得ずにいる。

しかし私が「神津牧場の組曲」に書いたあの風景の骨子は、今でもけっして変ってはいまい。

国境の山頂に沿って牧柵の走っている物見山から見る浅間、八ヶ岳、妙義、奥秩父の眺めは今もなお同じだろう。そぎ落としたような大岩壁をそそり立てた荒船山も、うずくまった獅子のような八風山も、下仁田へ向けて突風のようになだれ落ちている西牧川の谷も、千曲川のメアンダーを光らせている佐久平も、やはり、三六〇度の展望のなかに収まっているだろう。

牧場事務所の附属の建物は改築されたり増えたりして、そのあたりの模様は変ったろう

が、春の桜草や小梨の花、夏の夕菅や、ギボシ、百合、秋のナナカマドの紅葉は、やはり昔の場所に見出されるだろう。

そして最後にこれこそかわることのないものとして、薔薇いろの大きな乳房をぶらぶらさせたマダム達、まったいらな山のような背中と、巨大な腰と、豊饒の角とを持ったあの牝牛の群とがいるだろう。

彼女等は山の牧場のゆるやかな斜面に近い者は岩、遠い者は雛菊の花か麦粒のように散っているだろう。

また夜の牧舎の中では昼間の風や日光や草のにおいの浸みこんだ体から、むんむんとするような健康な熱気と体臭と乳の香とを発散しているだろう。

神津牧場の名を最初に私に教えて、其処へ行ってみる事をすすめたのは、その頃ヒュッテ・霧ガ峰をやっていた長尾宏也君だった。長尾君はその推奨を裏づけるように、私に故大島亮吉氏の山の随想の本を貸してくれた。本そのものも好評のようだったが、その中にたしか「神津牧場とその近辺」とか題する一文があって、それが当時評判の名文だという事だった。

私はヒュッテの自分の部屋でまずその文章のところをあけてみた。そしてそれだけ読むとぴたりとやめて、翌朝黙って長尾君に返した。黙っては返したが私はひどく不快だった。なぜならばその神津牧場の文章には、それより早く私の書いた「野の搾乳場」という長い詩の数行が或る所ではそっくり、或る所ではこまぎれにされて、急所急所に何箇所か裁ち入れられているのだったから。

私は永い間、その不快を誰にも洩らさずに堪えていたが、これも其の後、亡くなった或る友達が、その文章のちょうどその箇所を、私にむかって賞めたとき、私の不快は爆発してことの次第を彼に訴えた。すると彼の言葉がこうだった。

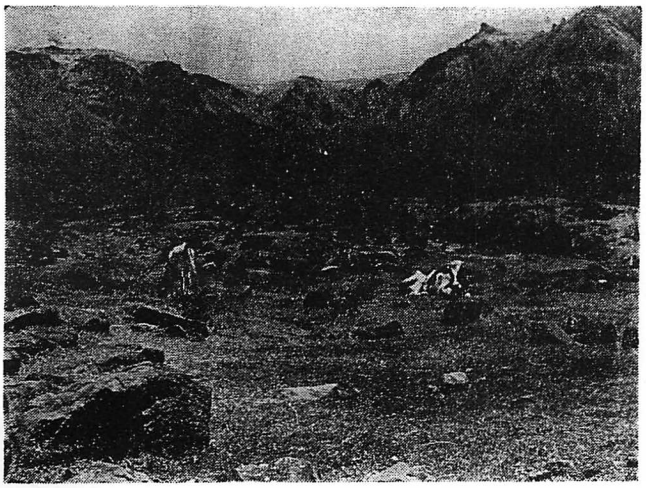
「それはむしろ名誉じゃありませんか。あれだけの人に利用されるなら！」

私は憤然とした。私はこの言葉のために、この親しい友の心事を疑がった。

しかしすべては過ぎ去ったことで、しかも二人の人も、いまはもう此の世にない。

そして、私にもやがては、其の日が来る。

ただ書物にはそれぞれいくらかの永遠があるものだとすれば、後の誤解を防ぐため、また私の「名誉」を護るため、進まぬながらも、こんなことを書いて置かなくてはならないのである。



撮影：尾崎喜八／画題：春の牧場
場所：信州美ケ原三城牧場
日時：昭和10年5月17日午前11時：快晴
『雲と草原』収録の「美が原」行の折に撮影されたものと思われる写真。

「現代ギター」対談

尾崎喜八＋富永恒雄

冷い春の雨にけむる鎌倉は水墨画そのものであった。〝オーイ〟と、待ちかねたごようすで、高台のお家の窓を開け放ち、あえぎながら坂道を登ってゆくわれわれに呼びかけられる先生のお声が、明月谷の静寂にこだました。

三ッ児の魂……

富永　先生のお生れが明治二十五年というと、私は昭和一桁なんですけれども、相当遠い昔ですね。

尾崎　事柄によってはばかに近い、きのうに思われることがございますね。

富永　たとえば？

尾崎　当時の小学校は音楽とはいわなかった。今の算数が算術。音楽は唱歌、そういうふうなぐあいでした。私の音楽歴は唱歌から始まりました。唱歌が好きだったんです。いまはこんなガーガー声でしょう。その時分はかわいい声らしかったんですよ。ボーイ・ソプラノというやつでね。私は築地、隅田の川っぷちで生まれて育ったんですけれども、うちが商売をしていたものだから……。

富永　なにか廻漕問屋とか……。

尾崎　ええ、廻漕問屋なんです。大きな船を二、三艘持っていまして、それで日本国中、少なくとも九州から北海道、それから伊豆の八丈島とか、あっちのほうまで交易をしていた。こっちからお酒だのお米を持っていって、向こうから干物だとか海産物、北海道からコンブだとか、そういうものを向こうから仕入れたり、そういう仕事をする廻漕問屋でした。それから着物の材料とか、そういうもの。だからお蔵がたくさんなくちゃいけないんですよ。

富永　どうしてですか。

尾崎　お米と干物と一緒にしていたんでは匂いがついちゃうでしょう。うちは隅田川のへりにあって、自分のうちの庭にいて白魚がしゃくれたり、その時分うなぎなんかもいました。向う岸に石川島造船所が、小さいけれどもあったんですよ。そして佃島、その向うに房総半島が見えるようなところです。それで、小さい時はおいたをしてお蔵に入れられるでしょう。二階に上がりますと……。

富永　お父さまは厳しかったんですってね。

尾崎　厳しかったですね。唱歌なんかは絶対禁止されました。商家ですから、そういうところですね。おいたをして蔵の二階へ追い上げられちゃうと、錆びた鉄の窓から銀座のほうが見える。高いといってもふつうのうちは二階で、たいがい平家が多いです。銀座をへだてて向うに丸の内、その時分は三越[*1]のレンガのビルディングが一つか二つ建っていて、あとは皇居の森と大菩薩峠、左に丹沢が見えて、大山から富士山、そんなふうな景色が見えたんですよ。だから山が好きになったんですね。それで音楽が好きだったでしょう、だからわざといたずらをして悪い子になって入れられたこともありますよ。

富永　そのころの唱歌といいますと？

尾崎　それをさっき思い出そうとしたんですが……。ま、物日（ものび）のときの歌だけですね。

富永　その物日の歌というのはそのころからあったんですか。

尾崎　物日といったってお正月と紀元節でしょう、ありましたよ。ところが声がいいというんで先生がかわいがってくれた。それでうちが築地の居留地に近いんです。そこへ小学校の先生が、クリスチャンらしくて、日曜になるとつれていってくれたんです。その居留地は広くて西洋人ばかりおって、聖歌を合唱するんです。初めて聞いたとき驚いちゃいましてね。オルガンが響き渡って、いいものだなあと思いました。

富永　先生が教会へわざわざつれていってくださったんですか。

尾崎　ええ、女の先生が、おやじに内緒でね。うちでは西洋がかった歌がすべていけなかったんです。ですから音楽はいけない。ところが男の先生が、お粗末なオルガンが学校に一

つありまして、それで唱歌を教えてくださったんです。その先生は小さいときアメリカかどっかへ行っていたらしいんですね。それで黒人霊歌ですか、ああいうものとか、そうかと思うとスコットランド、アイルランドの民謡、それを放課後残って、私だけに教えてくれたんです。それが小学校の三年、四年ですかね。それで歌詞の意味はわからないんですよ。先生は大体言ってくれるんですけれども、全然わからない、ただ口まねで覚えているんですね。

富永　下町の小学校にそういう先生が、その時代に存在したというのは……。

尾崎　どうもあいのこじゃないかと思う。鼻筋のとおった、顔のきれいな先生でした。その先生がとてもかわいがってくれましてね。

富永　じゃあそれが先生の長い音楽とのつき合いのめぐり会いですね。

尾崎　そう。それからその先生がハーモニカを吹くことを教えてくださったんですよ。おふくろがおやじに内緒でハーモニカを買ってくれてね。

富永　内緒ですか。

尾崎　西洋がかったことはみんなそうですよ。そんなのは芸人がやることだというんですね。文士なんてものも全然問題にしないんですから。詩を書くなんてもってのほかですね。とにかく商人の子はそろばんが上手で、字が上手で、応対が上手であればよろしいという、そういう家庭に育ったものですから、西洋音楽からは非常に遠いわけです。日本音楽は母親が琴や三味線、清元だとか長唄、そういうことはやっていました。だから小学校の先生から西洋音楽、西洋的メロディーですか、あるいは西洋的なムード、フィーリング、そういう感じ方を覚えたんです。それは私にとっては非常な仕合せだったですね。だから唱歌の時間というのはとても楽しかったです。「オールド・ブラック・ジョー」なんてのを教わったり……、明治三十年か三十二年、わけはちっともわからないんですけれどもね。それに居留地の子供たちの合唱なんかは実に感動しましたね。とっても美しかった。あれはいまでもはっきり覚えていますよ。そんなことが非常に近く思われることですね。ハーモニカを母親が買ってくれて、それで先生に教わった西洋のメロディーを吹くんですよ。うちでは絶対に吹けないから隠れてやるわけでしょう。それを私の母親のおっかさん、おばあさんのうちへ行ってそのおばあさんに聞かせると、とっても喜んで涙を流して聞くんです。そのメロディーはスコットランドの歌や「オールド・ブラック・ジョー」などで、「喜坊や、また聞かせておくれ」。それでこっそりふところに入れて持っていくんですよ。するとおばあさんが、そのころのお金で二銭くらいくれるんです。

富永　二銭といったらかなりですね。

尾崎　ええ、その時分の二銭というと焼き芋が六本か七本買えましたね。それでおばあちゃんを喜ばしていた、それも覚えていますよ。「喜坊や、聞かせておくれよ」、涙をこぼしているんです。

富永　それは一つには喜坊のかわいさと、ハーモニカの持っている哀切なメロディーがミックスしちゃったんじゃないですか。

尾崎　いま考えるとやはりそうですね。それから理科が好きでしてね、これがそもそも野山へ行くことが好きになるもとだったんです。

富永　でも先生のおうちの環境からいったら……。

尾崎　理科もだめだったんです。理科の材料は魚もいるし蟹もいるし、とれるんですよ。そういう具合いに、自然が好き、動物が好きでしょう、早く言うと、いまのぼくと同じことなんですよ。ちっともかわっていないですよ。好きなもの、それから私をして今日あらしめたものが、もうすでにそのときみんな好きだったんです。

ロマン・ロラン、そしてベルリオーズ

富永　先生の「花咲ける孤独」のあとの略伝を拝見いたしますと、私も似たような感懐を抱くんですけれども、小学校時代のちょっとしたそういったものに興味を示したというようなことと、ずっとそれが一貫して、いろんな障害はあったけれども、少年の夢みたいなものがずっと一生を通じて先生のお仕事になっているというのは、全くまねのできないようなことと痛烈に感ずるんですけれども。

尾崎　ただ西洋音楽との接触になりますけれども、私のうちは下町も下町、ほんとに川べ

りで、そういう商売をしていて、そういう家風でございましょう。ですからもう少し違った、いわゆる山の手の育ちの方たちはお母さんがピアノをやるとか、妹さんとか姉さんがピアノをやるとか、しょっちゅう聞いているような人がいますよね。野村光一君なんかそうでしょう。私どもはそれがないんですから、そんなのは聞くすべがなかったんです。西洋音楽との接触はやはりレコードですよ。

富永 滝廉太郎なんかは、卒業演奏でバッハのイタリアン・コンチェルトをやっているんですね。

尾崎 あるところにはあったんです。ただ私たちのような社会には、商人階級にはなかったですね。こういっちゃおかしいですけれども、私はわりあいと語学ができたんです。二十四のときにロマン・ロランの「今日の音楽家」の英訳を丸善で見つけて、とっても好きになっちゃったんです。大正四年でしょうか。

富永 それ以前には先生はトルストイとかそういうものに……。

尾崎 わりと語学ができたものですから、トルストイとかドストエフスキーなんかはみんな字引きを引きながら、私は商業学校ですけれども、読みました。

富永 陰で？

尾崎 ええ、陰で。音楽も結局、本から入ったんですね。ロマン・ロランの「ベートーヴェン」とか「ベートーヴェンとミレー」という本があったんです、重訳です。

富永 そのころはみんな重訳でしたね。

尾崎 ほとんどが英訳からの重訳ですね。そういうふうな時代ですから、音楽だといったってチャンスが与えられれば聞くことができるということです。だから銀座あたりの楽器屋へあるレコードが入れば、そうしてそれを買うことができれば音楽を聞くことができる。つまりあてがいぶちですね。もっとも、初めてベートーヴェンの大きいやつを聞きましたときは驚きましたがね。長年買えなかったんですけれども……、何が一番初めだったんだろう。

富永 先生は翻訳からお入りになったんですね。

尾崎 初めはそうです、本からですね。私が「近代音楽家評伝」という名前で訳を出したロマン・ロランの Les Musiciens d'Aujourd'hui、それから五年たって、二十九か八のときにベルリオーズの「自伝と書翰」というのを出したんです。

富永 ベルリオーズの名前をどう読むかということで、おもしろいことをお書きになっていましたね。高村（光太郎）さんと相談なさって「ベルリオ」にしたとかいうようなことを……。

尾崎 フランス読みを知らなかったんですよ。

富永 「ズ」を読むか読まないか問題になって……。

尾崎 ええ、山田耕筰さんに聞いても、あれは南のほうだから、南仏の生まれだから「ズ」は読まないかもしれない、と言う。柳兼子さんに聞いてもだめなんです。そんな時代ですからね。高村さんは蓄音器を買われて、あの人のことだから、イギリスの古い歌だとかドイツのリードとか、そういうのを聞いて感心していたんでしょう。こっちは本ばかりなんです。サン＝サーンスの名前も知っていればヴァンサン・ダンディの名前も、ロマン・ロランを自分で訳したからわかります。でも本物を聞いたことがない。当時、日比谷に野外音楽堂があったんです。毎日曜、海軍と陸軍の軍楽隊がそこでやるんです。好きな人が聞いているわけですが、あるとき、私たちもそこに居あわせてたら、「海賊の序曲」をやったんです。ベルリオーズです。それを聞いてびっくり仰天しちゃいましたね。たいへんな音楽がある……。

富永 もちろんブラス・バンドですね。

尾崎 ええ、それで自分で訳したベルリオーズなるものがこういうものか、と思って驚きましたね。ほんとにすばらしいんですもの。「海賊の序曲」ですから、何十本もの矢を射とおしてくるように聞こえるところもあるし、洋々と波が押し寄せてくるようなところもある。それがベルリオーズのなまのやつを聞いた初めですよ。

富永 サンフォニー・ファンタジックは当時はまだないんですか。

尾崎 ないんです、幻想交響曲は。そのできたいわれは彼自身の書いた自伝でもって、どうしてこんなものができたか、すっかり知っているんです。知っていながら聞くチャンスがなかった。

富永　じゃあ、たいへんお聞きになりたかったんじゃないですか。

尾崎　ことにあの人のロマンス、恋をして、だめになって、それからやがて今度は女の人のほうがだめになってベルリオーズにすがってきて一緒になったわけですよ。その最初の失恋のときにできたものですからね、あの曲は。

富永　幻想というか、ベルリオーズのあのころの生き方と先生の生き方がなにか似ているような気がするんですが……。

尾崎　似ているんです。だから自分でも好きなんですよ。それを好きにしてくれたのがロマン・ロランなんです。あれで教わったんです。ロマン・ロランは好きだったですね。私が手紙をあげたときに、日本でベルリオーズが愛されるということは実にうれしい、といって手紙をくださいました。

富永　ほんとにロマン・ロランとしてはびっくりされたんじゃないでしょうかね。極東の一小国から先生がお手紙を出されて。

尾崎　見たこともないやつなのにね。非常に喜んでおられましたがね。そういうことで、結局ぼくの最初に耳をあけてくれたのが小学校の唱歌の先生ですね。それからロマン・ロランですね。それも自分の好き嫌い、選択はあるでしょうけれども、根本をなすものはその二つなんです。

光太郎との出会い

富永　高村光太郎と先生の出会いというのはどういうことなんでしょうか。

尾崎　これは文学の世界の人々の持っていない清潔さを高村さんが持っていたということでしょう、私のあこがれは……。

富永　そうすると、高村光太郎がヨーロッパを回って帰ってきましたね。先生とはその後ですか。

尾崎　ええ、智恵子さんとまだ結婚しない時分で、結婚の話は出ていたかもしれない。

富永　先生と彼はたしか十ぐらいですか。

尾崎　私と九つ違うんです。その時分、銀座にたった一軒、松山省三というパリ帰りの絵描きが始めたフランス式のカフェで、カフェ・プランタンというのが、いまでいうと千疋屋の横丁を数寄屋橋の通りのほうへ出たところにあったんです。私は商業学校を出てすぐおじさんの関係している銀行へ勤めました。それで給料が入るでしょう。それは自分のものですわね。あと、おっかさんがこそこそとお小遣いをくれたんで、わりとそういうところへあこがれて行ったんですよ。そうしたらみんな亡くなっちゃったけれども、木下杢太郎、正宗白鳥、吉井勇、そういうのがいるんですよ。私はたいして好きじゃないんですけれども、わりあい銀座は近かったですし、とにかく銀座ではそこしか行くところがないんですよ。そうすると高村さんがいるんですよ。ところが高村さんは、その連中の集まるところへは決して一緒にならない。隣りに部屋があるんです。ガラス張りですっかり透けて見えるんですけれども、隣りの部屋で、ぼくの覚えているんじゃ三、四回ありますかね。小さなトランプで、七つ並べて、ページェントですよ。智恵子さんと婚約していたのか、その時分です。そうすると、ほかのやつは銀座へ行くんだから、行くかっこうをしているでしょう。高村さんは冬のさ中に一重ものに古い袴をはいて、鳥打ち帽子をかぶって入ってきて、それをやっているんです。そしてだべって、リキュールかなんかを一杯飲んで帰っていく。その一種の清潔さね。あの人だって知人がないわけはなかったでしょう。でも、みんなと決して一緒にならない。そして書くものは、その時分は「明星」とか「スバル」、そういうものに書いていたんですが、すばらしくエキゾティックな書き方でしょう。やたらにフランス語が原語で入っていたりしてね。文章はとにかくよかった。すっかりそれにほれ込んじゃった。二、三回道で会ったりしちゃって、思いのたけを述べようと思ったのに、全然声が出なくなっちゃってね。（笑）冷淡に扱われてね。自分は先生のお書きになるものが好きですとか、ましてや、あなたの人柄が好きですなどと、九つも年が違えば言えないでしょう。そのうちにある友だちと一緒に高村さんのアトリエに行くことになるんです。そのときに、忘れもしないけれども、おっかさんが白木屋でもって夏の着物と袴を仕立て、人形町の三橋堂という有名なお菓子屋のお菓子を特別に注文して私に持たせた。そういう、ごりっぱな先生のところへ行くんだから、と

いって持たせられたんですよ。そうしたら高村さんのほうがびっくりしちゃって。彼のところにはそんなお客はこないんですよ。美術学校の生徒とか、彫刻家の卵、そんなのばかりでしょう。みんなけむったがって、近くの森鷗外さんのうちへ行く人はあっても、高村さんのうちへくるのはごく熱心な人だったんでしょうね。そういう空気だったんです。

富永　そんな空気だったんですか。

尾崎　それから関鑑子、この人のうちがすぐそばで、その人が見えるとか、「スバル」の編集者が見えるとか……、それぐらいでしたよ。ときどき、ちらっちらっと女の人の姿がアトリエに見えるんですね。それからフランスの香水の匂いがするんですね。高村さんもそういう点はおしゃれだったんですが、なにか違ったいい匂いがする。どうも女の匂いなんですね。それが智恵子さんだった。私が新しく買ったレコード、高村さんが買ってきたレコードを、智恵子さんも一緒に、三人でよく聞いたものです。そのうちに結婚なさいましたが。

富永　旧姓は長沼といいましたね。

尾崎　ええ、私も初めのうちは長沼さんと言っていました。そうして私もだんだんにいろんなレコードを買うようになる。そこへいま彫刻家である高田博厚、それが一枚加わってきたんです。それはまだ福井県から出てきたばかりで……。

富永　美校へいらしてたわけですか。

尾崎　ええ、それでやはり高村さんのおかげで彫刻が好きになったんですね。高村さんは一生、先生ではなかった、私も高村さんのことを「先生」と呼んだことは一度もありませんし、高田もありませんよ。とにかく「さん」づけでしたからね。でもその意味では、われわれ二人にとっては師ですよ。高田と男子三人で一生懸命レコード聞いたものですね。高村さんはまだ蓄音器が買えなかったけれども、レコードは一生懸命買っていた。

富永　お話を伺っていると夢のような、回りが白く霞になって、その中で……。

尾崎　私は「白樺」の仲間だったんです。「白樺」には、そういっちゃ悪いが、音痴というか、元来……。

富永　白樺派には音楽がなかったわけですか。

尾崎　いま武者小路さんが生きているでしょう。ちっとも音楽なんか聞きませんよ。しょっちゅう、カボチャとか絵をかいて、ああいうことをなさっているでしょう。

富永　志賀さんは傲岸な方だったんですか。

尾崎　そうですね。私の知っているうちでは一番傲岸です。音楽もたいして好きじゃなかったね、いまでも好きじゃないようです。そうすると残るのは柳さんご夫婦(宗悦・兼子)ですよ。そのかわり柳さんのリサイタルには始終行きました。私は元来歌が好きだったですから、シューベルトの「美しき水車小屋の娘」、「冬の旅」、シューマンああいうのを買ってきて歌を覚える。そうすると、さっき言ったとおり、どうしてもおやじとだんだん合わなくなって、向うはまます商家の老主人になり、こっちはますます……、結局、合うわけないんで、けんか別れみたいになっちゃったんです。ぼくのほうから廃嫡してくれと言い出してうちを出て、自分は勤めをして、今度は自分で食わなくちゃならないから、もっともそのときの手切れ金というか、そんなものくれましたけれども、それもやがて使っちゃいましたね。いままで行きたかった温泉地、伊豆のほうへ行って、文章を書いたり、絵を描いたり……。

富永　先生が高村光太郎の清潔さに傾倒されたということは、徒党みたいなものがおきらいなんですね。

尾崎　きらいです。そして、決して人がきらいではない。ほんとうに人がきらいだったら、いわゆる厭人家ね、人をいやがる、そういう人は音楽を好きになれないと思うんです。音楽を好きになれる人は、この世に対するなつかしみとか、そういう大切なものを持っているんじゃないかと思うんですよ。音楽はまた、年をとってもなおかつこの世を讃美する、いいなと思わせるゆかり、因子を持てるような気がするんです。だから私、音楽家に対してはとても好意を持っています。尾崎さんは音楽家ではだれが一番好きか、と言われると困るんですよ。ベートーヴェンも好きですし、バッハも好きです。私の中では順位をつけることはできないんです。まあ二、三十人おりますよ。それはみんなそれぞれ、いまでも、それぞれのときに聞きたくなる。

富永　先生のお書きになったものを拝見する

と、そのときに応じて彼が出てき、彼が出てき、というふうに、二十指三十指の音楽家がいっぱい出てくるんですね。だから実にカラフルというか色彩豊かというか……。

音楽は心の支え

尾崎　こういうことがありましたよ。三年ぐらい前ですか。厚生年金会館でベートーヴェンの「ミサ・ソレムニス」をやったんです。

富永　ローリン・マゼールかなんか？

尾崎　そうそう、たしかそのときだと思いました。けれどもほかの印象が強かったものですからね。というのは、「キリエ」が終って、「クレド」が始まったときに、かなりうしろの方の席でしたが、私の隣りにいた娘さんがせき込み始めちゃったんです。ひどいせきなんですよ。ベートーヴェンの音楽は大波のようにゴオーッと進んでくるんでしょう。その人は、かわいそうに、コンコンせきをしている。まわりの人はじろっとにらむ。それからベートーヴェンの「ミサ・ソレムニス」がすべて終って、「神の仔羊」に至るときまで、その人に、私もその時分せきが出たことがあったのでしょっちゅうさいふの中に持っていたせき止めの薬をあげて、背中をさすってやったんです。これはぼくにとってはたいへんな経験ですよ。ミサ・ソレムニスはエクスタシーの音楽ですよ。みんな酔って聞くわけでしょう。そこに一人苦しんでいる女の人がいる。恥かしいのと苦しいのと、そして聞いている人のじゃまをしている。それをぼくがさすってあげたということは、音楽のために、ぼくも手伝って、そして一人のために尽くしているという気がしましたね。それこそベートーヴェンの心にかなうんじゃないかと思いましたよ。

もう一つの話は、年中、土曜、日曜に上高地に行っているんですが、その帰りに乗鞍へ行ったんです。すずらん平の一番先の〝ヒュッテ・乗鞍〟というところへ案内されて、そこに泊ったんですけれども、ずぅっと天気がようございましてね。その翌日、いろんな花が咲いていました、小鳥もいっぱい鳴いていました。その中を車を使ったり、少し歩いたりしますと、一の瀬牧場という、何にも家畜はいないんですけれども、何しろ広い牧場があって、四、五種類のつつじが燃えるように咲いていて、それからちょうど盛りのこぶしの花がまっ白に咲いていまして、それはもう、実に美しいんです。そうすると向うには乗鞍の一番左の方の峰、高天ヵ原とか剣ヵ峰が残雪に光って、まっ青な空にくっきりと立ち上がっている。そして回りは白樺の林があったり、そうかと思うとつつじの大群落がずぅっとあったり、足もとにはすずらんがいっぱい咲いている。そこはあまり人が行かないところなんです。奥だものですから知らないんですね。林の中では慈悲心鳥がたくさん鳴きしきっているんです。そこへ寝ころんで乗鞍の雪の峰を見ていますと、頭の上をヒュッ、ヒュッと翼の音を立てて雨ツバメが飛んでいく。あれはほんとうに山の世界なんですよ。まっ白な高天ヵ原と剣ヵ峰と……、いいなあと思っていたら、ベルリオーズが出てきちゃった、彼の音楽が……。「イタリアのハロルド」が……。

富永　あのビオラの……。

尾崎　そう。ほんとうにいいなあと思いましたねえ。それで第一楽章から第二楽章まで頭の中で大体感じはつかんでいますから、よござんしたねえ。これは乗鞍のすそ野へ来てよかった、ベルリオーズを聞いてよかった、と思います。そういう感激がございました。ちょうどさっきのベートーヴェンのミサ・ソレムニスと対になるような感じですね。

富永　そうですねえ。

尾崎　私がもしも、少しでも一生涯をよくして、楽しく生きがいがあったと思って暮らしていけたとすれば、音楽のおかげですね。そういう点で自分を刺激してくれた高村さんとか、あるいはそういう心持ちを保たせてくれたフランスの、最近死んだジョルジュ・デュアメル――「慰めの音楽」を書いた人です。

富永　あれはほんとにすばらしい本ですね。話の腰を折るようですが、先生がデュアメルのお仕事、デュアメルと限らないですけれども、翻訳をなさるときには、ちょっと辞書を引いて、たださらさらとふつうの人は訳していくんだけれども、尾崎先生は違うと、串田（孫一）さんの解説で読みましたけど。ちゃんと一行ずつあけて、まずその本を訳されて、それと同時に、一つの訳語に対するあらゆる

同義語をいろいろ考えられて、そうして日本語を厳選して訳される。たいへんですね。それでこそデュアメルの、ああいった尾崎喜八訳のすばらしいニュアンスの翻訳文体が出てくるんじゃないか……。

尾崎　やっぱり詩をやったおかげでしょうね。文章を書いたり……。

富永　だから先生のデュアメルの作品を読んでいると、それ自体が日本語としてなっていますね。

尾崎　それはありがとうございます。

富永　だから先生ご自身のオリジナルの作品とデュアメルの翻訳との差がないんです。

尾崎　私もないと思います。

富永　だから私は尾崎喜八訳じゃないような気がするんです。尾崎先生の新しい創作みたいな形に思えてしょうがない。

尾崎　ま、音楽が好きだというのは一生の仕合せでしたね。まだ、〝でした〟でもないか。(笑)その点じゃ、いろんな人の恩を受けていますね。人間というのは、何かできるためには大勢の人の助けを受けて、助けてくれた人は途中でむなしく死んでしまったり、あるいは志が遂げられないで終っちゃった人もたくさんいる、だから長生きをしたらよけいにそれを感じて、機会あるごとにその遺徳をたたえるべきだとぼくは思うんですよ。

　ところで、ぼくの詩を読んであげましょう。

富永　うわぁ、うれしいな。

尾崎

されど同じ安息日の夕暮れに
Am Abend desselbigen Sabbats…

十五年のその昔、美砂子よ、お前は二歳、
私は幼いお前をかるがると背負い、
白い頭巾をすっぽりかぶせ、緑の毛布に厚
くくるんで、
まだ雪の消え残る信濃富士見の高原に
天上の春の最初の使信、
復活祭の雲雀の歌を遠く求めて歩いたもの
だ。

今、成人してその天からの春の知らせの深
い意味を
ようやく身うちに感じている若いお前が、
年こそ経たれ、この同じ復活祭の夕暮れに
私のためにバッハのオルガン衆賛曲(コラール)を弾い
てくれる。
そしてもうお前を抱く事も背負う事も叶わ
ない私が
毛布を膝に、指を組んで聴き入っている。

しかしその年老いた今日(きょう)の私を
お前が憐み、いとおしむのはまだ早い。
私はこうして、ここにまだ在る。
まだいくらかの仕事の日々も許されている。
しかし、しかし、そういう私の存在が
やがて懐かしいこの世から消えた時、
或る春の同じ安息日の夕暮れに
お前はふと私の訪れを空気に感じて、
同じコラールを、花の窓べに、
一層深い思いで弾いてくれるだろうか。

(尾崎喜八著「その空の下で」創文社刊から)

　昭和二十年に焼けちゃって、昭和二十一年に、東京に住むところがなくなって富士見高原に行ったんです。そのときの詩[*2]です。

富永　その富士見の生活というのが、いまの詩の富士見高原ですか。

尾崎　そうなんです。そして孫が上諏訪で生れて、[*3]それを書いたときに二歳だったんですよ。昭和二十一年から七年間一緒に住んでいたんです。[*4]

富永　でも、富士見の生活というのは先生の生活の中では……。

尾崎　それはさっき言ったやつ、自然が好きで、山が好きでしょう。よかったですよ。

富永　先生のいままで生きてこられた道程を見ますと、富士見の生活はいまになってみれば、うまくはまっているというか……、先生ご自身はほんとうにお苦しみになられて、そこで七年間を過ごされたんじゃないかと思うんですけれども。

尾崎　いや、そうでもない。ひなびたメヌエットですね。自分のいるところに歌があればいいですね。やはりこれは、ほんとうに音楽のおかげですね。

(「現代ギター」昭和四十六年四月号)

編集部注

この対談の原稿はなんらかの理由で語り手の

チェックを受けなかったものと思われる。話の勢いで勘違いをしたものと思われるので、編集部で確信のもてる範囲で注を付した。

＊1　三越→三菱

＊2　詩→事

＊3～4　それを書いた時は十七歳（S41）、昭和二十三年から一年間共に富士見に住み、翌年から二十七年まで毎年一、二箇月祖父母の元に預けられていた。

新アスレチック（二）

私は音楽会にゐる。二階桟敷（ママ）のでつぱりの端が、ちやうど庇のやうに出てゐる其の真下の、列の中央よりも少し右寄りの席にゐる。此の席とその近隣の地点とが一番聴きよい場所だといふ事を、私はずつと以前に友人のトロンボーン吹きの人で、同時に（日本では喇叭族の楽器に関係のある楽手を今でも幾らか軽く見ると云ふよくない傾向がある）セロ弾きの人から教へられてゐた。此の友人は、いつたいに大型の管、絃、打楽器、共によいのである。たしか「エグモントの序楽」で此の人が大太鼓とサンバアルとを同時に打ち込んだあの怖るべき効果を、あの仁王のやうな顔や、あのうはづつた眼と共に私は今でも忘れない。

ところで私と来ては、此の事にも一ぱし通じたいと心がけながら、遂にドもレも聴き分けられない音楽会聴衆の一人である。従つて私はこんな有利な席に座を占めてゐても、細かい演奏上の効果が非常によく聴きとれると称せられる場所にゐても、詩を批評する時のやうには作品や演奏の批評は為もしないし、又出来もしない。たゞ、信用の置ける専問（ママ）家の好意ある忠言を天真爛漫（ナイーヴ）に墨守しながら、たゞ心情をもつて傾聴するために、他人よりも常に余程早目に到著して、何はあれ此のくろうとの席を占領するのである。

ほのぼのとエヂプトの曙めく光が、やはらかに瀰漫した音楽会場。一段と明るい演奏舞台を聴衆席から仕切る額縁に嵌められた、艶消し電燈の真珠の帯。見上げる乳白の天蓋から吊るされた五彩の宝石を鏤めたやうなシャンドリエが、下の方の聴衆の顔の海へ、むしろノクタアナルな影を落としてゐる。

私としては此のじいんとした明るさが好きである。それは深山の森の空地を照らす、古代のやうに澄んだ日光の、英雄伝説的な静寂な明るさを思はせる。私が人よりも早く音楽会に到著する時、殆んど空虚な大広間の片隅で、この森厳な明るさを瞑想する利益が得られるのである。しかし今は上も下も人で一ぱい。油で塗り固めた斉髪や、逞ましい断髪が、立つたり座つたり、人差指を立てゝ合図したり、肩をすぼめてにつと眼を見合せたり、小型の総譜本（パルチツウル）を仔細らしく出したり仕舞つたり、すべて所謂音楽ファンの特色を、――あの上品らしくスマアトな、あの冷たくアンパツシブルな、或はあの傲然たる慎みの―あらゆる美徳を、遺憾なく発揮してゐる。上の方の三階の席に、どんな若い熱烈なオリヴイエやアントワネットが鮨詰になつてゐるか知らないが、下の方の上等の席が殆んど精神なき社交（モン）界でふさがつてゐる光景を私は此の眼で見るのである。玄関前の広場には、後から後から到著する数十台の幌型やセダン型が、初夏の夜の涼しい星の下で整然とその黒い砲列を布いてゐた。

鈴が鳴る。人々がさやさやと席につく。いろんな顔が、いろんな心理現象が眼に入る。しかしそんな事はもうどうでもいゝ。舞台の右左の口から五十人のオーケストラが二等分されて入つて来た。「心の奥の奥の誰かがはしやぎ出す」と云ふ或る詩人の句は、いくらか此時の私の気持を説明してゐる。彼等はそれぞれ楽器と譜面台とを控へて一の山塊を形作る。ヴイオリン手はその断崖の岸である。此処で彼等の絃の輝くさざなみが立つのである。二列縦隊を作つた第一と第二とのヴイオリンの先頭が向ひ合つたところ、その突端に指揮者の影絵が後ろむきに立つ。指揮棒（バトン）が水平に上つて静かに止まる。それは今にも揺るぎ出さうとする楽器の噴火山を、一本の細い短かい魔術の棒で軽くおさへてゐるのである。

と、澄んだ秋の暁の、森の霧を通して響く猟笛のやうな、岩山の空洞から流れ出して来る風の音のやうな、管の音色にヴエイルを纏つて現はれ来る我が「自由射手（フライシユツツ）の序楽」の冒頭の純潔な笛の音。独逸ロマンチシズムの目ざめの歌が初（ママ）まつた。此の音楽に沈潜するが

いゝ！

エクトル　ベルリオズは此の序楽に就て論じた文章の中で曰く、「あたかも森の深みで風に吹き散らされた一つの遠い嘆息のやうに、オーケストラのトレモロを通してクラリネットによつて投げられる呻くやうなあの長いメロディー。それは私の心を正面から打つ。そして下の方でざはめき威嚇する一つの陰気なアルモニーの間に、空に向つて内気な言ひ立てを洩らすやうなあの純潔無垢の歌は、少くとも私にとつては、現代の音楽から生れたものの中で、最も新らしい、最も詩的な、又最も美しい対照の一つである」と。此処でベルリオズ自身が詩人になる。そして彼の如きロマンチシズムの鷲鳥がウエーベルの中世伝説の詩的音楽に酔ふのは在りさうな事である。しかし私はこんな註釈で読者を饗応する気ではないのである。

音楽会がはねて、電車の方へ、ほの明るい爽かな神宮外苑の中の大道路を歩きながら私の考へたのは、我国の詩人といふものが、一般に芸術家といふものが、此の音楽の漲る泉を飲まないで、これを所謂音楽ファンの事として風馬牛でゐる事である。此の源泉から魂の養ひを摂らない事である。此の純潔な唇に彼等の唇をつけない事である。その心臓の上に身をかゞめて、永遠の生の鼓動を聴かない事である。彼等は痩せる、彼等は見すぼらしい、強健な、明敏な、純粋な、豊かな新世代が生れなければならぬ。

（「東方」七月第三号　昭和三年）

詩人と音楽

明治・大正の時代はもとより、今日でさえ、日本の名ある詩人や作家のなかに、音楽を愛してその心を深く音楽で養われ、その芸術家としての素養や関心のなかで音楽の啓示が一つの大きな地位を占め、彼らの作品から音楽と通じるところのある美の息吹きを感じさせる人のほとんど皆無なのを、私はふだんから淋しく思つている。

われわれの心のたまたまの乾燥や枯渇を救うものが時に一つの美しい旋律であり、一連の絶妙なハーモニーであるとすれば、文学のそれを救うものもまた音楽であるとは言えないであろうか。音楽はすべての芸術の母なる天であり、その作品は天来の啓示だからである。

音楽とその偉大な使徒たちからの薫陶を無視しては、その生涯の業績や人間形成の跡をほとんど考える事のできないロマン・ロランは暫らく措くとして、ジョルジュ・デュアメルとヘルマン・ヘッセとは、一生を通じて音楽にその最善のものを担い、それを公言し、老いていよいよ愛する事をやめず、機会あるごとにこの芸術への感謝の念を披瀝している現存の二人の大家である。

デュアメルは彼の最も美しい本の一つ『慰めの音楽』の中で言っている、「音楽は地下水のように私の生涯の王国の到るところを流れている。音楽は私の仕事の到るところに在り、私はごく僅かな機会でもあれば彼女を崇め、彼女に仕え、彼女に対して私の感じている感謝の念を何らかの方法で現わすことを怠らなかった」と。また別の本の一章の中では、「それならば解放と慰めとの音楽に光栄あれ！　われわれが自分たちの思想を思索し、自分たちの苦悩を悩み、この余りにしばしば混乱して狭隘で不可解な人生を、一層の力と、一層の豊かさと、一層の調和とをもって生きようとする時に、他の何物よりもよくわれわれに助力する、この敬慕すべき芸術に光栄あれ！」と讃えている。

彼の大作『パスキエ家年代記』の第七巻は、主人公ローラン・パスキエの妹で世界的な女流ピアニストであるセシールの成功と危機とをえがいた傑作である。

シラー、ヘルダーリーン、メーリケなどと故郷を同じくするシュワーベンの詩人ヘルマン・ヘッセは、少年時代から家庭内での詩的・音楽的雰囲気に養われた。彼自身もヴァイオリンを弾くことを習い、特に歌が上手で、作家として名を成してからも古い民謡や、シューベルト、シューマン、フーゴー・ヴォルフらのリートを愛して歌ったらしい事は、自伝的な小説や、多くの随想や回顧録などからも察することができる。音楽家との交友も多く、大ピアニスト・フェルッチオ・ブゾーニ、チューリッヒの指揮者アンドレエとも識り、わけても現存するスイスの作曲家オトマー・シェックとは長年にわたる親交があった。彼

の詩「エリーザベット」、「春」、「ラヴェンナ」はこのシェックによってリートとして作曲されている。

ヘッセが「エンガディーンでの体験」という文章の中で、自分の音楽鑑賞の態度の変化を述べているくだりは興味がある。「著名な音楽家の演奏会を最初に聴いた頃には、たしかに暫らくの間は、彼等の名人芸の魔力に陶酔したように圧倒される事がよくあった。しかしそういう魔力にかかる事はあまり長くは続かなかった。私は充分に健全だったから、限界を感じ取り、感覚的な魔力の背後に、まさに作品と精神とを求めるようになった。幻惑させる指揮者や独奏者の精神をではなく、巨匠の精神をである。むしろ私は年と共に、名手の魔術に対して、彼らが作品に加えた甘美さや力や情熱がおそらくほんの僅か多すぎても、過度に敏感になった。才気に富んだり、夢遊病者的であったりする指揮者や名手を私はもはや好まなくなり、枝葉にわたらない厳正さを貴ぶようになった」

こういうヘッセが、同じチェロの大家でも、その芸術的な点で、演奏の厳(ママ)びしさと渋さにおいて、演奏曲目の純粋さと非妥協性において、パブロ・カザルスよりもピエール・フールニエを選んでいるのは当然と言えるかも知れない。反俗物主義者で不屈の精神の持主で、青白い幽霊のような顔をしたブゾーニを敬愛する彼が、ベートーヴェンを弾きながら唸り声を出したり葉巻をくわえたりしている老大家に、あまり好意を持たない気持はよくわかるのである。

そのフールニエがオーバーエンガディーンのサン・モーリッツの宿で、明日は出発するというその前日、特にヘッセを自室に招いて彼のために一時間か一時間半、心ゆくまでチェロを弾いて聴かせるくだりは美しい。音楽はバッハの独奏組曲である。「それはあらゆる感覚を開き、呼び出だし、鋭くしてくれた。その日一日かかって自分には出来なかった事、つまり日常の世界を脱してカスターリエンに向かって踏み出す事を、音楽が数瞬間で成しとげてくれたのである。力強く正確にきびしく弾かれた音楽は、私にとって餓え渇いた者にとってのパンと葡萄酒との持つ味がした。それは栄養であり、浴みであり、心に元気を回復させ、息がつけるようにしてくれた……」

そして此の「体験」を書いている時、詩人ヘッセは老齢七十六歳なのである。

（平凡社「世界名詩集大成」月報7　昭和三十四年）

音楽（一）

この前の文章で読書のことを書いたついでに、私は夜の食事のすんだ後で何かクラシックの音楽を一曲レコードで聴くことにしているというような事を書いた。ほんとうに昨夜もそうで、旧暦十月の十五夜を落葉でうずまった戸外の庭に想像しながら、バッハのヴァイオリンとオーボエと弦楽の合奏、あの天国的なアダージョを持つニ短調の協奏曲を聴いた。今年の春日本へ来たドイツの或る室内合奏団の演奏で初めて聴いてその限りない美しさに打たれて以来、もしもレコードになって出ているものならばどうにかして手に入れたいと念願した望みがかなって、この十月ようやく自分のものにした宝のような一枚である。春の東京での実演の時にもたしか同じパートを受けもったラインホルト・バルヒェットがヴァイオリンを弾き、クルト・カルムスがオーボエを吹いている。そして合奏部はクルト・レーデル指揮のプロアルテ室内オーケストラである。

考えてみると、私はこの夜の一曲の曲目を、昼間仕事をしているあいだや外出の途中などで決(き)めている場合が多い。今夜は久しぶりにベートーヴェンの弦楽四重奏曲を、それも彼の若い頃の作品一八の四、その最初の楽章が第一ヴァイオリンの憂いをたたえ迫力に満ちた第一主題ではじまるあの懐かしいハ短調のカルテットを聴こうとか、モーツァルトの第二五番のピアノ協奏曲、あの夕日の最後の壮麗、悲しい日没前の一瞬打ちひらけた風景のような作品、魂の清澄なけだかさに貫かれたハ長調ケッヒェル五〇二に傾聴しようとか、そんなふうに心にきめて憧れながら楽しく夜を待つのである。そしてその憧れが、必ずしも常に心にかなったとばかりは言えない昼間の仕事や、時にはまったく味気ない用件のための外出から私の厭(いや)気や苦痛を軽減してくれるのである。レコードは持っているのだから、

聴きたい時にいつでも聴けばよさそうなものだが、それはやはり私の連帯的義務感というか、自分で自分に課している規律というか、そういうものが許さない。空に太陽のある時間にはみんなが働くか勉強しているのである。私にしてもそうあるべきだ。人はみずから抑えて待つことを知らなければならない。じだらくや放縦に馴れている人には自制の後に来る解放の喜びは味わえないだろう。

ジョルジュ・デュアメルは彼の『慰めの音楽』の中で、家族や友人で組織されたアマチュア合奏団の楽しさを述べながら、そういう事が広く行われるように勧奨している。そしてよしんば楽器に不得手な人でも、人間大抵は歌を歌うことはできるだろうから、声をもってこれに参加したらいいと附け加えている。つまりこの詩人は合唱カンタータやコラールのようなものを考えて言っているのである。この十数年来バロック音楽の再認識と、これを演奏して楽しむ風潮が世界的に盛んになってきて、日本にも既に知られているもの、未だ知られないものを含めて、かなりの数の親密なアンサンブルが有るようである。私のいちばん身近かなところでは、友人串田孫一さんを中心としたコンセール（或いはコンソート）・ゼフィールがそれで、この人達の扱う楽器はブロック・フレーテ（木管縦笛）の一族である。そして発足後団員一同急速に腕をあげて、十六世紀から十八世紀にわたるそのレパートリーも次第に幅と奥行きとをひろげつつある。やがてチェンバロやリュートなどもこれに加わるにちがいない。

実は私も名誉団員ぐらいの資格で、時にはこのアンサンブルの片隅で何か吹いている筈なのだが、指の老化と練習不足のせいかあまり参加の機会を持たない。それでたまたま気の向いた時に、家にいてたった一人で、椅子の妻や木の枝の小鳥を気の置けない寛容な聴き手として、もっぱら平易でやや憂わしげな曲のレントやアダージョを吹いている。潑溂たるもの濶達なものへの、この熱情や憧れにもかかわらず！

（「創文」昭和三十七年十二月号）

バッハとシュッツ

東京バロック音楽協会の演奏会の夜、上野文化会館小ホールの会場で、私は聴衆席の最前列、それも舞台へむかって中央からちょっと右寄りの席にいた。そしてチェンバロの活躍を主としたその夜のバッハばかりの全曲目も、私にとっては感動と喜びとのなかに惜しや次々と鳴り消えて、さて最後の最大の期待、『ブランデンブルク協奏曲』の第五番が、弦楽器の合奏で奔流のように押し出した。

むかって左に遠く独奏フルートとヴァイオリン、右手に近くチェロとダブル・バス、うしろの壁に沿ってヴァイオリンとヴィオラの一列。そして半円形にふくれた舞台のまんなかの、高い崖ぷちすれすれに白い大きなチェンバロの占拠。そのチェンバロとチェロとの真下にいる私は、いわばブランデンブルク号という大洋航海船の傍腹に、ぴったりと付いて浮かんでいる小舟のようなものだった。だから音楽はバランスをもって正面から吹きつけず、方向にせよ、量にせよ、常にいくらか片寄りながら私に来た。しかしそういう席にいたおかげで、私は聴く楽しみのほかに見る楽しみ、ある楽員たちの精妙な指の動きや、美しく熱した集中的な顔の表情を、すぐ目前に見る喜びを味わうことができた。

営々として玉をつづり絹を刻んでいるかと思うと、たちまち颯爽と腕を舞わすチェンバロ奏者のまなざしの変化。一見いくらか眠そうな顔をしていながら、心火は内に烈しく燃えて、耳をそばだててよく聴けば、涼しく爽やかな旋律を孜々として弾いているチェロ奏者。また今宵バッハを弾くことが嬉しくてたまらないような、若くて頼もしいバス奏者。演奏家と聴衆とが感奮を共にする現場の徳がそこにあった。私は時々伸び上がってチェンバリストの肩ごしに、フルートとヴァイオリン独奏者の力演を観察した。またこれはちょっと無作法なことかも知れないが、前に立ちはだかったチェンバロの腹の下から、その三本足の股の間から、壁ぎわに並んでいる弦楽合奏団の列をのぞいて見た。踏んばった六本のズボンにまじって一つだけスカートが見え、若い女のヴァイオリニストの静かに熱した顔があった。ブランデンブルクという逞しい調和の海に、ひとつの寄与をしている女性の顔

が。

二月二日の聖燭節の晩には、毎年の例によって、蠟燭のあかりの下でバッハの第八二番のカンタータ『われは満ち足れり』と、二〇〇番のカンタータのアリア「われ、その名を告げん」の二つをレコードで聴き、その後でオルガンを弾きながら「平安びとをもてわれは行く」のコラールを歌ってみた。その翌日、夫君がシューベルトの風貌を持ち、奥さんが病後のマドンナを想わせる芸術家の友人夫妻が見えたので、もてなしにドイツ盤のシュッツのレコードを聴かせた。『音楽的葬礼ミサ』や『キリスト復活の物語』のような大作でなく、『ダヴィデ詩篇集』の中の「われ、山にむかいて目を上ぐ、わが助けはいずこより来たるや」を選んだ。持っているシュッツの盤の中で、小さくても私の特に愛する一つだからである。四声の独唱者によって美しい詩句が歌い継がれて、その一つ一つに二部に分かれた四声の合唱がついているこの曲は、単純で高貴で、敬虔(ママ)で憧れにみちていること、これがバッハやヘンデルより百年も前の人の作かと疑われるほどである。ブクステフーデやパッヘルベルやテレマンもいいし、コレルリ、パーセル、ヴィヴァルディもそれぞれいいが、あの時代の作曲家として、また人間として、私には彼らの先人ハインリヒ・シュッツが、やはりいちばん心に訴えてくるように思われる。

（「レコード芸術」昭和三十九年三月号）

バッハへの思い

この幾年、私はヨーハン・セバスチアン・バッハを思わずには、彼の音楽の広大な土地や建築物のことを考えずには、自分の老いた日々の生活に行為や思いの装飾を施したり、やすやすと限なく照らす日光を感じたり、これで善しというゆったりとした是認を与えたりすることができなくなっている。バッハこそ唯一の師であり、相談相手であり、慰め手であり、行って静かに心の渇きを癒やす泉でもあれば、たまたま狭く閉された思いが広々と開放される天と地との眺めでもある。たとえ重なる体験と追憶とに夏のように楽しく欝蒼とはしていても、人間や社会との接触の上で生きることを重荷と感じる時もある。そういう時にその苦痛や不安を解きほぐして、光や空気をなみなみと入れ、対位や和声の方法を配して美しい解決を与えたり、荷物の重みを軽減したりしてくれる人、私にとって、バッハをおいてほかにはない。

私は自分の日々の生活に行為や思いの装飾を施すということを初めに言ったが、それにはちょっとした註釈が無くてはいけないだろう。このごろの或るよく晴れた日曜日、時は昼まえ、私は十歳になる男の児をつれて自宅のまわりの静かな屋敷町を散歩していた。折からどこの家の庭にも白い梅の花が咲きはじめて、それが塀や生け垣をこえて暖かく清らかに光っている。ところがそういう庭の一つで一羽の四十雀(しじゅうから)が鳴いていた。真黒な梅の老木の青い針のような枝にとまって、くちばしを大きくあけ、小さい頭を左右に振りながら囀っているのである。私は手を引いて歩いている孫にそれを教え、彼の脊丈けだけ身を低くして小鳥の居場所を指さした。こういう早春の季節と場所と、こんな時の小鳥を今までの生涯に私は数限りなく見てきた気がする。私はその数十たびの経験をどんなふうにでも美しく書けるし、どんなに興深くでも他人に話して聴かせることができる。しかし、今はそこへ一人の孫が登場した。これは歳をとって初めて得られる経験である。そしてその孫はこのごろ理科で生物を学んでいる。してみれば私の教えてやることも、もっと小さかった頃の彼へのそれとは違うはずである。そしてこれもまた大事なことだが、その梅の庭、四十雀、愛してやまぬ男の孫、無風快晴の日曜日とその午前、こうしたモティーヴの重なり合いのあいだから、ふと、バッハの『平均率ピアノ曲集』の或る曲が私の脳裏をかすめたのだった。いや、特定の或る曲というよりも、むしろそれの前奏曲やフーガから抽象された一つの観念だったという方が本当であろう。しかしともかくも、この音楽の瞬間的なひらめきが、私のその朝の体験に或る装い、或る飾りを与えてくれたことは事実である。そしてこうして富まされた散歩から帰ったあと、私がレコードで『平均率』の二、三の曲を聴いてこの潜在的なものをうなずきながら

確かめたこと、これもまた言い添えて置いていいかも知れない。

これを書いている今日から一週間後には、ドイッチェ・バッハソリステンの一行が今年もまたやって来て、東京で第一回の演奏会を開くというので、私もその日を待ちわびている。そしてバッハの作品ばかりから成る豊富で充実したプログラムの中に、「眠れ、なんじ疲れたる眠(ママ)よ」のアリアが挟まっているのを見て喜んでいる。バッハの妻君アンナ・マクダレーナの楽譜帖からのように註をしてあるが、おそらく第八二番のカンタータ『われは足れり』Ich habe genug の第三曲目のと同じアリアであろう。そうだとすると、いっそのことそのカンタータ全曲をやってくれたらばと惜しまれもするのである。なぜならば私は特にその第一曲が好きであの風に吹かれる秋の枯葉の波のような弦楽器群の愁いを含んだ音型の上を、明るく澄んだオーボエの、黄ばんだ空の雲のように、歌い流れてゆくところが、得もいえずいいからである。そしてそれに乗って始まる「われは足れり」のあのアリアである。両手のうちに喜ばしく救い主への信仰を抱いて、安らぎのうちにこの世を去って行くという確固とした決意と諦念。それは私のようにまだいくらかの未練をこの世の生につないでいる者には悲しく響くが、いつかは自分もそのようにして去りたいという思いとあこがれとは、この歌を聴きながら他人事ならず育てられもすれば鼓舞されもするのである。

このカンタータを聴いたり心に思い浮かべたりすると、さっきの孫との散歩の時に『平均率』が頭をかすめたのとは反対に、今度は私自身の体験が、すなわちずっと昔や最近に自分が訪れた幾多の山や高原の風景がよみがえってくる。そしてその風景はいつでも夏の終りか秋の自然で、私はきまって草にすわって、散りいそぐ木の葉や色あせてゆく空の色や、赤みを増した大陽(ママ)の光に見入っている。この音楽は信仰による平安な死へのあこがれを歌ったものには違いないが、それを根本の基調としながら、今の私には、一方ではまたこんな自然をも追体験させるのである。

（「音楽之友」昭和三十八年四月号）

オルゴール

ついこのあいだ、東京銀座のある楽器店へレコードを買いに行ったついでに入り口に近いオルゴールの売り場の前を通ったら、きれいな音で鳴っている「オールド・ラング・サイン」のメロディーがふと耳に入った。私は思わず立ちどまって、ずらりと陳列された木製の小さな箱だの、別荘風の家だの山小屋のような家だのの一つから、可憐にもまじめに奏でられて来るこの古い歌の旋律に聴き入った。

このごろのオルゴールは昔のと違ってかなり精巧で、随分複雑な曲もやるようになった。顔見知りの若い女店員はその私の顔に微笑しながら、この箱が鳴っているのですよと教えるように、かわいい水車のついた何処か外国の農家をかたどった木箱を無言で指さした。私はうなずいて、ちょっと目で礼を言って、さて奥の方のクラシックのレコードの売場へ行った。

「オールド・ラング・サイン」というのはスコットランドの古い民謡「シュッド・オールド・アックェインタンス・ビー・フォアゴット」（故旧忘れ得べき）の中の一句で、「在りし昔」とでも訳したらいいだろうか、日本では古くから「蛍の光」として歌われている。その「蛍の光」も悪くはないが、やはり元の歌の構成の堅固さ、リズムの溌剌さと男らしさ、愛や友情の鄙びた美しさには到底かなわない。私は小学校の時にこの原語の歌を唱歌の先生から特別に教えられて、わけもわからないくせに怪しげなボーイ・ソプラノでよく歌ったものである。そして長じて原詩の意味がわかるようになると、ますますこの歌が好きになり、今でも下手ながら心をこめて歌うことが時々ある。

今は亡い高村光太郎さんもこの歌が好きだった。「蛍の光」で知ってはいたろうが、本場のイギリスでこれを聴いてしんから感動したとの事だった。そういうわけで、互いにいい歳になりながら、どっちから始めるともなくよく一緒に歌った。そして共に歳をとればとる程、この「故旧忘れ得べき」に深い感慨が加わった。なぜならば、あの駒込のアトリエで初めて私の歌ったのが二十二か三の時、

それに和した高村さんがまだ三十一か二の頃の昔だったのだから。

「尾崎君にオールド・ラング・サインを言われるとたまらないよ」と、満七十三歳で死なれる一年だか二年前に、新宿駅西口のビヤホールで二人だけでジョッキを挙げたある昼間、その高村さんがつくづくと私に言った。それはこちらも同じ事であり、殊に私にとっては自分の長い詩人の生涯のなかで、高村さんこそは故旧も故旧、生涯のどんな土地、どんな地平からでも、必ず仰ぎ眺めた遠く又近い導きの星である事に変りはなかった。

レコードを買った金が少しかさんだので、水車のついた田舎家のドアをあけると「オールド・ラング・サイン」の鳴り出すあのオルゴールを買わずに帰ったが、そのうち東京へ出かけて幸いまだ有ったら、今度こそ手に入れようと思っている。あの敬愛する先輩の思い出のためにも。またあの単純で素朴で趣き深い音楽から誘い出される、私自身のさまざまな懐しい追憶のためにも。

私の手許には今三つのオルゴールがある。すべて十数年前に人から贈られた記念の品である。バッジやネクタイピンやカフスボタンが入れてあるのでそれらを取り出そうとどれか一つをあけると、そのたびにそれぞれ自分達の歌を始める。串田孫一さんからのは「ホーム・スイート・ホーム」を、八ガ岳山小屋の女主人幸代さんからのは「別れの曲」を、そして諏訪の学校の先輩(ママ)浜子さんからのは、「エリーゼのために」を。しかもその後大して手入れもしないのに今でもちゃんと鳴ってくれる。さながら今に変らぬ贈り主の心のように。

（「現代の眼」昭和四十四年九月号）

ピアノに寄せて

ピアノを弾ける他人をどんなにうらやましく思っても、自分にはとうてい弾けないのがなさけない。何しろ生まれた年が明治も半ばとあれば、もうずいぶんの昔になる。そのうえ東京も築地に近い隅田川べりの廻漕問屋、そんな旧弊な商家の一人っ子とあっては、時代一般の風潮といい、育った家庭の雰囲気といい。(ママ)ピアノなどとはおよそ縁が遠かった。もっとも築地の異人館（外人居留地のこと）へ遊びに行っている時など、花の咲いたアジサイやサザンカに半ば隠れた窓の奥から、玉をころがすようなあの音が聴こえて来ることもあるにはあったが……。

今でこそ孫娘の音楽室にグランドとアップライトが黒く光って並んでいて、時には私も恐る恐る蓋をあけ、右手の指先でゆっくりした宗教歌かシューベルトの旋律ぐらいならば押してみる事もあるが、それ以上はなんにもできない。しかしつい先頃、ドイツ協会本部から新らしくとどけられたハインリッヒ・シュッツの楽譜で「パリサイ人と収税吏(ひと　みつぎとり)」というのをやってみて、初めて知ったこの美しい歌がうたえた時にはほんとうに嬉しかった。独学ではあったが歌だけは若い頃から好きで、よくうたった。だから今でも孫娘に伴奏してもらって、昔なつかしいシューベルトなどをたまにはうたう事もある。今カバレフスキーのソナタをやっている彼女としたら、さぞかし古風な祖父に見えるだろうが、それでも迷惑そうな顔もしないで「白髪の頭(デア・グライセ・コッフ)」を伴奏してくれている。

白髪もいい処まで来てしまった今、それでも音楽への愛だけは私から薄れない。そしてこの愛情の火さえ消えて行くようだったら、もう自分もおしまいだと思っている。幸いまだ音楽会へも出かけられるし、レコードならば持ち合わせもかなりある。しかしこの頃は壮大で響き豊かなものよりも、概して静かに心を慰め憩わせてくれるような曲にむかう事が多い。もちろん時あって精神の振るい立つようなものを求める事もあるが、いずれかといえば交響曲のような大がかりな物よりも、弦楽四重奏曲とかピアノ独奏曲のような物に心を引かれる。かつては胸を躍らせて聴いた大曲、けっして聴きのがす事のなかった大曲を、今では年に一度か二度しか聴かない。こちらの生の活力がそれに耐えられなくなったのかも知れないが、それよりもむしろ、永年の人生体験がその重みや厚みのために、今やかえって軽減と離脱とを求めているのではないかと思う。自分の選ぶ音楽が、溜々(ママ)たる真昼の海や大河から、潺渓(せんかん)とうたう夕べの泉へ

とその岸を変えて来たのだと思う。

たとえばシューベルトの器楽曲の場合でもそうである。今の私にはあの「神々しい長さ」を持った大交響曲よりも、むしろピアノの『即興曲』や『楽興の時』のほうに心が引かれる。私はけっして恩知らずではないつもりだが、モーツァルトやベートーヴェンの場合にしてもそうである。同じピアノでもどちらかといえば、協奏曲よりも独奏のソナタを採る。このごろのある夜のこと、私はレコードの棚の中から偶然一枚のディーヌ・リパッティを見出して、彼の弾くバッハの『パルティータ』第一番と二曲のコラール・プレリュードと、モーツァルトのK三一〇番のピアノ・ソナタとを聴いて、喜びながら、若くしてこの世を去ったあの稀なる天才の上に深い思いをはせたのであった。

（「ピアノ通信」昭和四十六年一月号）

私の青春とともに暮らしたレコード

私が育ったのは東京も下町の商家だったから、幼い時から歌舞伎や寄席や相撲にはよく連れて行かれた。従って音楽と言っても琴、三味線、笛、太鼓に鼓のたぐいで、洋楽器としては小学校の唱歌の時間の哀れなオルガン、町を行く広告屋の大太鼓かラッパかチャルメラ、それに家から近い築地の外国人居留地で、たまたま洋館の窓から洩れて来たピアノの音くらいのものだった。しかし先生が弾くそのオルガンと、外国人の奥さんだかが弾いているそのピアノの音や調べが、「この子は変っているよ」と言われる程、私には日本の楽器のそれよりも遙かに美しく懐かしく響いた。私が音楽を好きなのは生来なのかもしれないが、西洋音楽を好きになったのは確かに小学校での唱歌の先生からの影響と言える。声が割合に綺麗で、歌が好きでよく歌い、そのため唱歌の先生に愛されて、まだ九つか十ぐらいの時から特別に黒人霊歌だのスコットランドやアイルランドの民謡などを教えられて歌っていたのだから、船や倉庫や帳場や算盤の世界に育った子としては、確かに変っていたに違いない。ところがその私の歌を好きで、よく「喜イ坊や、またあの外国の歌を歌っておくれ」と「オールド・ブラック・ジョー」などをせがんだのが、その頃七十幾つだかになる祖母だった。むかし大奥とやらに勤めていて、茶や書や琴や三味線をよくした下町出でありながら、幼い孫の歌うそういう外国の歌が殊の外好きだったから、私としては天来のパトロンを持っていたと言うべきだろう。しかしこんな話はこれでやめよう。

一体蓄音機という物をこの私は何時何処で初めて見たり聴いたりしたろうか。これも小学の二年か三年の頃の朧げな記憶だが、何でも鉄砲洲の稲荷か越前堀の地蔵の縁日の夜だった。白い幕を張った小さい屋台店の真中に置いた台の上に器械を据えつけ、太く短かい円筒形の膓管を挿しこんで、それを螺旋で廻して音を再生する仕掛けだった。しかしその再生音は無料では聴かせず、二銭だか三銭だか取って、その客の耳に挿し込んだ長いゴム管の端から聴かせるようになっていた。お客は地面へ立ったまま三分か五分で終る団十郎か菊五郎の短かい科白や義太夫か清元の一くさりを聴いて満足するのだった。私も一、二度は聴いたが、別におもしろくもないからじきにやめた。しかし時たまそれにラッパを着けて音を大きくして、客寄せのために無料で聴かせることもあった。おそらくこれが音響拡大装置つきの蓄音機の最初の物だったろうと思うが、よくは分らない。しかし、そんな時でも洋楽風のものは一度も耳にしなかった気がする。

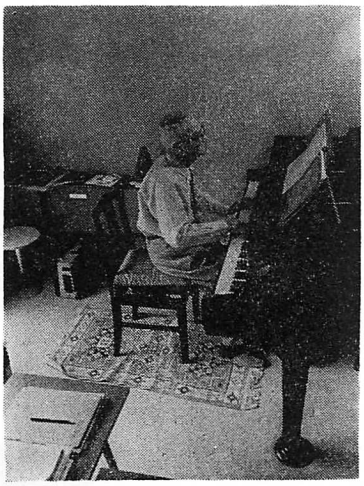
大正年代に入ると既に今日のいわゆる蓄音機なる物が現れるようになった。しかし、それも時々ハンドルを廻さなければならない物で、大概はラッパを付けて使っていたように覚えている。一匹の犬がそばに坐って「彼の主人の声」に聴き入っているあの画のようなそれである。そしてその頃から、少なくとも私にとっての時代、真の洋楽時代が始まった。しかし、そういう時代は始まっても、最初にも書いた通り私の家は商家なので新しい時代の空気は入って来なかった。それに無論ラジオもなかった。だから蓄音機のある山ノ手の友達の家へでも行かなければ、円形の平面盤を廻転させて針を載せて聴くような外国音楽に接する事はできなかった。しかし、その平面盤も一枚の廻転時間が短かくて、片面五分

間かそこらで終ったような気がする。先ず断然歌曲が多く、楽器による独奏がこれに続いた。今でも覚えている演奏者の名は、高村光太郎さんと二人で夢中になったユリア・クルプを初めとしてエレナ・ゲルハルト、シューマン・ハインク、リリー・レーマン、アデリナ・パッティ、シャリアピン、エンリコ・カルーソーであり、器楽の部門ではヴァイオリンのエルマン、クライスラー、クーベリック、ジンバリストらが忘れられない。ピアノでパデレフスキーを聴いたのもその頃であったろう。やがて管弦楽を聴けるようになったが、ベートーヴェンにしろワーグナーにしろ、いずれも著名な大曲からの抜粋だった。クーベリックの弾く『G線上のアリア』を初めて聴いて、そのメロディーと音色の美しさとに涙を流したのは、今は故人となった作家長与善郎さんが赤坂福吉町の家にいた頃である。

商人になる事を嫌って父の家を出た私は、初めて味わう独立自由の中で多年の憧れであった蓄音機やレコードを買った。まだSPの時代ではあったがもう色々なものが出ていた。初めのうちはおもに一枚物を買ったが、やがて数枚一組のものを無理をしてでも手に入れるようになった。買いに行くのは銀座の十字屋だった。戦災でほとんど失ってしまったが、その中のごく少数が危うく助かって今でも私の手許にある。ベートーヴェンではワインガルトナーの指揮による第六、第八、第九の交響曲がそれぞれ全部、同じく弦楽四重奏曲ではカペエ・カルテットの『ラズモフスキー』第一番、やはりカペエでの作品一三一と一三二、それにブッシュ四重奏団での一三五。バッハでは同じブッシュ指揮の『ブランデンブルク協奏曲』第二、第三、第四、第五番、さらにアルベルト・シュヴァイツァーの弾いている『オルガン音楽』七枚。それにどうしたものかリヒャルト・タウバーの歌っているシューベルトの『冬の旅』全曲と、ハインリッヒ・レーケンバーの歌っているマーラーの『亡き子を偲ぶ歌』が揃っているいずれにしても今手許にあるのは総数六十枚。あとはすべて他人に与えたか防空壕の中で焼けたかしてしまった。そのうち十何枚だかで一組だったベートーヴェンの『荘厳ミサ』を、終戦直前埼玉県のある教会に贈った事がせめてもの慰めである。

私は自分のレコードをすっかりLPに改めたのは、戦後の疎開先だった信州富士見から東京の新居へ移って以後の事である。あれから二十数年、レコードはすべて銀座の山野楽器店からずっと続けて買っている。レコード用に造らせた棚はもうどれも一杯で、今では幾つかの大きなレコード箱が書棚の前に並んでいる始末である。それを見兼ねて孫娘が行き届いた索引を作ってくれているが、さていつ完成するやらそれも分らない。しかしこれら無数のLPレコードのどれか一枚からでも私の魂が鍛えられ、心が養われ清められるとすれば、これはやはり単なる贅沢品以上の物、無くて叶わぬ物の一つと言っても言い過ぎではないであろう。

（「レコード芸術」昭和四十七年一月号）



昭和44年，北鎌倉にて（撮影：遊佐隆昭）

尾崎喜八書誌——初出目録・補遺(一)

嘉納忠明

凡例

(1)尾崎の初出（初発表）作品を検索する資料として、これまで「尾崎喜八資料」に掲載した「新聞・雑誌掲載目録」がある。通常、初出は、新聞・雑誌で大方を占めているが、その他にも種々の媒体がある。

(2)本資料(1)は、先ず月報・全集類に編纂されたものを年代順に掲げた。これらの他に、レコード解説、パンフレット類、そして、自著書き（訳）下ろし本、自著本に初収録、著者翻訳書の解説等がある。これから逐次収録したものを掲載したい。

(3)月報（附録・栞）は、全集・選集等に於て各巻が刊行されるごとに、その巻の鑑賞・研究の手引きとして各氏の感想や随想が附録として編まれたものである。単行本にも付くことがある。

(4)表記について

(イ)編者名の付け方。全巻編者或は代表者であるときは書名の前に記し（例、百田宗治編『現代詩講座』）、その巻だけのときは書名の後にカッコで括って記す（例、『近代文学鑑賞講座16・高村光太郎』（伊藤信吉編））。

(ロ)名称の簡略。外国作家は、最初はフル・ネームで記し、二度目からサー・ネームだけにした（例、ロマン・ロラン→ロラン）。

又、書名に作家名が付いている場合、作家名を省略した（例、ヘルマン・ヘッセ『ヘッセ詩集』→『ヘッセ詩集』）。出版社に於ても同様、書房、書店等を省略した。

新聞・雑誌掲載目録　補遺

「桜に対する感想」（アンケート）　又新公論　大12・4

「活動写真に就て」（アンケート）　又新公論　大12・5

「若い白樺」（詩）　東京堂月報　昭8・7

「紅葉美の偲ばれる大屋根」　アサヒグラフ　昭11・9・30※

「最近の山の本から」　東京堂月報　昭14・7

「帝国海軍を讃嘆す」（詩）　新若人昭18・5＊

「リルケ詩抄(10篇)」（翻訳）　窓　昭30・5＊

「訳詩の思ひ出」　窓　昭30・5＊

「音楽の魅力を語る」（てい談—串田孫一・井上太郎）　音楽現代　昭47・1

註（※）この文には、「自然観察のハイキング—新コース秀麗奥秩父」という大見出しがついており、中央線小淵沢から三国峠までの前半を中西悟堂が執筆し、三国峠の下りから中津川渓谷を辿る後半の経路を尾崎が記述している。尾崎はこの旅の中で梓山の地に余程感銘を受けたのか、後年、再訪した時を含めて幾篇もの作品を残している。尚、同行したカメラマンは堀内讃位であった。

月報・附録

「高村光太郎恭敬」『現代詩人全集(新潮社)』月報4　S4・10

「再生の頃」『ヘルマン・ヘッセ全集(三笠書房)』月報6　S15・2

「渝らぬ感謝」『現代世界文学全集(新潮社)』月報6　S28・3?

「第一詩集の頃」『全詩集大成現代日本詩人全集(創元社)』詩人と詩集4　S29・3

「思い出(その一)—ラコッチィ・マアチ」『高村光太郎全集(筑摩書房)』月報4　S32・7

「思い出（その二）—上河内」『同右』月報6　S32・9

「車内の偶会」『世界文学大系（筑摩）』月報2　S33・4

「木暮さんという人」『現代紀行文学全集(修道社)』第6巻附録　S33・7

「串田さんの山の文章」『串田孫一随想集(筑摩)』月報4　S33・8

「詩人と音楽」『世界名詩集大成（平凡社）』月報7　S34・8?

「ロマン・ロランと自然(1)」『ロマン・ロラン全集（みすず書房）』月報XIV　S34・12
「ロマン・ロランと自然(2)」『同右』月報XV　S34・12
「生涯の太陽」『ベートーヴェン選集（筑摩）』第11巻附録　S37・4
「詩―木暮先生」『日本山岳名著全集（あかね書房）』月報1　S37・5
「『山の絵本』の思い出」『同右』月報2　S37・6
「そのおもかげ」『現代文学大系（筑摩）』月報31　S40・11
「晩秋の午後の夢想」『高村光太郎全詩集（新潮社）』附録　S41・1
「カロッサの教訓」『ドイツの文学（三修社）』月報4　S41・2
「林町のアトリエ」『日本詩人全集（新潮社）』月報9　S41・11
「ヘッセの詩とその翻訳について」『世界詩人全集（新潮社）』附録3　S42・?
「私のバッハ」『世界の音楽（小学館）』月報5　S?
「私のヘルマン・ヘッセ」『新潮世界文学（新潮社）』月報9　S43・10
「続・私のヘルマン・ヘッセ」『同右』月報10　S43・11
「その人の俤」『手塚富雄全訳詩集（角川書店）』月報2　S46・11
「先輩高村さん」『日本文学全集（集英社）』月報13　S47・5
「そのおもかげ」坂本波之『麦明（現代書房新社）』附録・回想波之　S48・9

全集・選集・共著本（散文）

「ベトオゼンの手紙」（翻訳）小泉鉄編『天才の手紙』T7・1　阿蘭陀書房
「高田博厚君に就て」尾崎喜八『空と樹木』（詩集）T11・5　玄文社詩歌部
「デュアメル『光―四幕』」（翻訳）『世界戯曲全集35・仏蘭西篇(5)仏蘭西現代劇集』S3・1　近代社戯曲全集刊行部
「ユナニミスムの詩人」百田宗治編『現代詩講座3・世界新興詩派研究』S4・12　金星堂
「詩に於ける現実（アンケート）」百田宗治編『今日の詩』S7・2　金星堂
「雲の中で刈った草」草野心平編『宮沢賢治追悼』S9・1　次郎社
「現代の長詩鑑賞」山本三生編纂代表『日本文学講座9・新詩文学篇』S9・10　改造社
「農村の事」木村荘太『林園賦―新農場生活記』S10・4　建設社
「さすらひと知見の旅―春の美ヶ原・初めに驚きありき・心象断片・秋山川上流への小さい旅」高橋健治・黒田正夫・角田正夫編『山岳講座6』S11・4　共立社
「私の隣組」大政翼賛会宣伝部編『私の隣組』S17・10　翼賛図書刊行会
「笛・柿」日本放送協会編『第二放送随筆』S28・11
「冬物語の一幕・冬の庭」日本放送協会編『随筆春秋』S31・8　東西文明社
「ジャン・エスカラ、ベルトラン・ケンプ『山と文学（前半）』」（翻訳）『山岳 la montagne 3・山の芸術』S33・3　朋文堂
「ヘルマン・ヘッセと自然、その他」『ヘルマン・ヘッセ全集別巻・ヘッセ研究』S33・4　三笠書房
「三つの詩とその思い出」『近代文学鑑賞講座16・高村光太郎・宮沢賢治』（伊藤信吉編）S34・6　角川書店
「アルプ・牧場・うつくしがはら」串田孫一編集代表『山のABC』S34・12　創文社
「ザムスコーラ」（翻訳）『リルケ全集9・エッセイ・文芸論』S35・7　弥生書房
「エステルとアンリエット―ベルリオーズ」『女性のための音楽教養講座2・音楽と女性』S35・10　音楽之友社
「鳥居峠」串田孫一編『峠』S36・5　有紀書房
「ベートーヴェンと自然」『ベートーヴェン選集6』S37・8　筑摩書房
「富士見・霧氷・ウェストン祭」串田孫一編集代表『山のABC2』S37・12　創文社
「池ノ平雪渓・上高地シラカバ林・上高地」『図説日本文化地理大系9・中部I』S38・2　小学館
「蝉を彫る―高村光太郎」串田孫一編『私の中の一つの詩』S42・6　文理書院ドリーム出版

「安曇野―松本で・山葵田・上高地の谷で・美ガ原」 主婦と生活社編『カラー旅5・信州と飛騨』S43・3 主婦と生活社
「鎌倉随想―北鎌倉あたり・谷戸への愛着・滑川で・寺と海と・小さな生命たち」 主婦と生活社編『カラー旅4・鎌倉と東京周辺』S43・11 主婦と生活社
「おごそかな夜明けの山」 主婦と生活社編『旅情1・山』S44・3 主婦と生活社
「野辺山の思い出」 主婦と生活社編『旅情3・高原』S44・3 主婦と生活社
「頂上・雷雲・堰(せんぎ)」 串田孫一編集代表『山のABC3』S44・12 創文社
「カロッサ・ヘッセ・ジャム」『世界の詩別巻・詩を味わうために(海外篇)』(小海永二編) S46・7 弥生書房
「詩集『貧しき信徒』評」 田中清光・八木とみ子編『八木重吉 未発表遺稿と回想』S46・9 麦書房
「その土地への序曲・折り折りの記」 大佛次郎編『素顔の鎌倉』S46・10 実業之日本社
「ヘッセとの出会い」 高橋健二他『ヘッセへの道―高橋健二古稀記念論文集』S48・10 新潮社

富士見町の尾崎喜八記念館(仮称)計画の進行状況について

石黒敦彦

富士見町に尾崎喜八記念館を作り、その中に喜八の遺品、資料、書籍類を大規模に寄託する計画があることは、すでに第五号で中山政市氏(富士見尾崎会会長)に書いていただきましたが、その後一年が経ち、計画も当初の形からだいぶ変わってきております。そこで今回はその経過報告をかねて、どのように進展しているかについてお知らせいたします。

まず、昨年来の一番大きな変化は、旧「中央公民館」を転用するはずだったものが、独自の建物を新築することに変わったことです。この変化に伴って、展示プランなども当初私たちが考えていたものとは異なりつつあります。昨年までの案では、旧公民館の一階を富士見に滞在した文人たちが町に遺した文物を展示し、二階を尾崎家から寄託された遺品、資料類の展示に充てるというものでした。

この基本構想は、現在の新館建設に際しても踏襲される見通しですが、この新館自体が「町立総合文化センター」計画の分館として位置づけられるかもしれないこと、また目的、名称なども拡大されて、「町立文学館」「自然史博物館」のような施設になるかもしれないことなど、町側の構想に変化がみられ、それとともに喜八の扱いも変転しつつあります。

そこで、遺族・研究会側としては、こうした状況の変化に対して、寄託する側として最低限どのようなことを望んでいるのか、を明確にしておくために、下記のような文書を昨年十一月に、富士見町教育委員会に提出いたしました。今後もまだ様々な変化が予想されますが、当方としては喜八の遺品、資料類の大部分を寄託すること、それが質、量ともにこの計画の中心であることをつねに自覚して、町にアドバイスをしていく必要があると思います。

尾崎喜八の詩人・文学者としての特色、および富士見町との関わりにおいて尾崎喜八記念館(仮称)を建てる意義

■その仕事と人柄

尾崎喜八は青年時代に詩人高村光太郎、千家元麿らの影響を受けて詩作活動に入るとともに、武者小路実篤、志賀直哉らの「白樺派」に属して、ロマン・ロラン、音楽家ベルリオーズらの著作の翻訳を行い、文壇にデビューした。

尾崎は詩人であると同時に、昭和のごく初期において、自然および山と文学とを結合させる分野を切り開いた先覚者でもある。また、文学活動の初期(大正五年)から昭和四八年(没年の前年)にいたるまで、ヨーロッパのクラシック音楽をその文学作品の中でつねに賛仰してきた。西欧音楽もまた、尾崎の仕事の大きな柱の一本としてある。

その人柄、生活態度は、作品に現されているものとたがわず、絵画、音楽、諸芸術に対する芸術家らしい深い理解、博物学的自然に対する緻密な観察とその美の探求、健気に生きる人々に対する人間愛などは、生涯を通じて変わることがなかった。

■富士見との出会い

敗戦後、東京を焼け出されて後、こよなく愛していた信州八ヶ岳の山麓、富士見の地に、思いがけなくも住居をかまえることになった尾崎は、詩作のかたわら、戦後の混沌とした時期に、この世を生きる上で大切な「豊かな心」を説くために、請われれば教職員の会合、小・中・高校生への講演、婦人会や村の集まりにも積極的に加わり、講演活動を行い、その人たちの住んでいる郷土の自然の美しさを語り、その美を愛することを教えたり、詩について語ったりした。また、村人への俳句の指導や、自然に対する博物学的な知識を生かして、高冷地農業の改革や農家の生活改善に対しては蔭ながら応援したりして、青年層の心の灯となる活動を続けてきた。

富士見の地に村人たちと同じ心を持って住むうちに、富士見高校の校歌の作詞、高原中学の校歌の補整を依頼され、後年富士見小学校の校歌を作るにいたった。この仕事は、以後、長野県内に多くの校歌の作詞を遺す契機となった。

■尾崎喜八記念館(仮称)建設の機運の勃興

尾崎没後六年がたった昭和五五年には、富士見町尾崎会（中山政市代表）の発案で、町および町民多数の理解賛同を得て、その寄付によって富士見高原中学校敷地内に「富士見に生きて」詩碑が建立され、以後毎年八月末に碑前の集いを行い、詩人の遺徳を偲ぶ催しが続いている。

こうした下地の上に、この数年来、尾崎の詩人としての生涯、および尾崎の眼を通して見た富士見高原の自然のさまざまな相を一堂に展示した尾崎喜八記念館を富士見に作りたいという意向が、尾崎会諸氏から出されていたが、尾崎の遺族も喜八がこよなく愛し続けた富士見の地に、故人の記念館が建てられるのは望外の喜びであるので、建立決定の暁には、故人遺品の大幅な寄託を行い、富士見町の文化を内外に示すに足るような展示企画を行うべく、指導、協力の申し出があった。

具体的には、詩人・博物学者の眼を通して見た「富士見の自然」のコーナーを設置して、小学生から町人までに、郷土の美の再発見、学習の契機にしてもらう。記念館の機能を利用して、講演、演奏、イベントなどを企画していけるようにする、などである。

この記念館に地元の青少年が愛着を持ち、親しむうちに、将来心豊かな人生を送ることのできる人間となり、あるいは、音楽、絵画、文学など芸術や自然科学の分野を学ぶ志を持てるような芽を育てる場となることを切に望む次第である。

仮称・尾崎喜八記念館の内容と構想（案）

一、詩人の書斎復元

このため、書斎にある書籍、机、音響機器、小物などすべてを寄託

一、詩人の生涯を写真、説明文パネル、作品、遺品展示で示す。

一、詩人の眼を通して見た富士見の自然、地質、植物、鳥、昆虫、気象、天文のコーナーに分け、各コーナーにそれに関する尾崎の詩または随筆の一部を展示。さらに自然観察に用いた遺品を展示。その他カラー写真、パネルなどで富士見の植物、蝶などを分類・展示する。

◎富士見近辺の山々を含む立体地図模型

一、詩人と音楽

視聴覚、読書、ミーティングなどが可能な部屋を開設する。

一、特別展示

年に一、二回の特別展示を行う。

例「高村光太郎と尾崎喜八特別展」

「貴重写真に見る五〇年前の富士見の自然」

自然科学のイベント、など。

要望書

富士見町教育委員会教育長　名取剛三殿

同　教育次長　植松米作殿

同　公民館長　雨宮伊一殿

一九八九年一一月九日

尾崎喜八研究会

富士見尾崎会

故尾崎喜八遺族一同

前述のような記念館建設に際して、故尾崎喜八の文学的遺品等を富士見町に寄託するにあたり、以下のことを要望いたします。

一、名称を「尾崎喜八……館」とすること。
一、展示企画、運営については、町と尾崎喜八研究会の間で話し合いながら進めていくこと。具体的には、尾崎研究会を館の諮問機関として公的に位置づけ、企画の決定に際しての権限を与える、など。
一、館の基礎設計の段階で、町側、設計士、遺族の三者の合議を必ず行っていただきたい。
一、館が開設された後も、富士見の文学、自然のセンター的機能を持たせていくという方針にのっとって、極力、専従の館員を置いていただきたい。
一、館の開設後も尾崎喜八に関する資料を収集し、逐次完備していくことが必要である。単に遺族から寄託されたものをそのまま構成、展示するだけの館ではなく、たとえば「富士見に行けば尾崎—山の文学関係の資料が充実して揃っている」という評価が確立していくような活動を、強く希望する。それはまた、館の特色を、余分な費用をかけずに演出していく上でも、もっとも効果あるものだと確信する。
一、右の要望に付帯するものとして、館の建設に際して、資料の収集・整理・保管を行う場所——倉庫の確保を考慮していただきたい。
一、寄託される物件について
遺族より寄託される物件は、尾崎の遺品の大部分ではあるが、すべてではない。遺族側は、「死蔵」を避ける上でも、必要以上のものを寄託することはできない。
一、右の項目に付帯する要望として、町側には是非、寄託物件の最終決定以前に、どの程度の規模の施設になるかを遺族に明示していただきたい。遺族としては、施設の規模、アフターケア（研究員の有無、保管体制など）の程度に応じて、それに見合った規模の寄託を行う所存である。
一、年に一、二度は、是非、特別企画、展示を開催していただきたい。

以上のような書面を教育委員会宛に提出してあります。この書類は、一九八九年十一月十三日に、尾崎栄子、石黒敦彦が鎌倉から富士見町民センターへ赴き、尾崎会名取正人氏と共に名取委員長にお渡ししました。

結局この一年の動きとしては、構想自体は膨らんだりしているようですが、建設される場所、年度などについてはいまだに具体的ではなく、昨年の中山氏のご報告以上の進展はまだ見えないといっていいようです。

ただし、富士見町の今年度の会計の中に、資料整理・準備のための予算を組んでくださるとのことですので、当方としてはまず展示資料の構成、整理から着手することになると思います。

その折りにはまた、企画、実務に関して、研究会各位に是非ご協力いただきたく、ここにご報告いたします。

研究会だより

尾崎喜八のように寡作の人であっても八十二年の生涯となると、資料を整理してゆく段階でさまざまな項目が必要となり、生前、几帳面に作品の年月日や掲載先を記録したり、日記をつけたりする習慣がなかったため、その発掘や解明には困難をきわめるような事態に度々遭遇する。新たに古い作品の情報を会員からいただいたり、思いがけぬ関連を見出したりした時の悦びは格別なのである。現在書誌目録、遺墨、校歌、放送放映関係を調査していて下さる諸氏の事は第1号2号に記したが、古い時代の作品を度々提供して下さる佐々木靖章氏、第三者の文章の中に出てくる尾崎の事を見つけてはコピーを送って下さる野本元・波部秀久・杉本賢治諸氏等その都度お名前は銘記しないがそのご協力には深く感謝し、又励まされているのである。

今回からこの紙面を借りて、研究会の会員諸氏におつたえしたい事、悦びを共に分ちたい事などを書いて行きたいと思う。それによってどんなものを探しているかどんな事が整理の対象になっているかが分っていただけるし、現在尾崎に関してどんな動きがあるかご報告をする事も出来ると思うのである。

●東京及びその周辺の企業に勤務する二十代から五十代の方々による男声合唱団「メンネ

ルコール広友会」がその結成十周年を記念して、合唱曲の作曲家多田武彦氏に委嘱作品の作曲を依頼された。多田氏は現在までに数多くの詩人の詩に作曲をし、尾崎喜八の詩による男声合唱組曲も今までに二つ作っていられる。多田氏は広友会の為に尾崎の詩を選び、「春の牧場」「金峰山の思い出」「故地の花」「音楽的な夜」「樅の樹の歌」の五篇からなる組曲『樅の樹の歌』を作曲された。半年にわたる練習の上で平成元年十二月三日にその初演の演奏が行われたのである。広友会の方々は尾崎の詩を手にされると、その詩にほれこんで下さり、詩の心に一層近づきたいと富士見の分水荘跡や碑を訪れ、金峰山の麓に行き、鎌倉の尾崎宅や明月院の墓碑をも訪ねられた。このように一度に沢山の愛読者・同志を得る事が出来、その一人一人に接する事が出来たのは望外の悦びであった。この『樅の樹の歌』が次々他の合唱団に歌われるようになって、その中の何人かが尾崎の詩に心を寄せられるようになって欲しいと願わずにいられない。

●メンネルコール広友会が委嘱曲完成記念出版を編まれるにあたって、当研究会は「尾崎喜八資料」4号に掲載した「富士見の夏草の果てに」「伊吹麝香草」「晩秋」の三篇を提供したが、記念誌編集の際、編集者西野一雄氏の追究の熱意によって、4号ではマイクロフィルムが不鮮明なため読み取れず□印で不明のまま載せた三箇所が解明された。4号21頁上段、曽遊の夏の山・21頁中段、日夜を護られ慰められて、である。

●地方美術館で平成二年度に催される「高村光太郎 智恵子 その造型世界」展に光太郎が縮尺模刻したミケランジェロの聖母子像が展示される。この母子像については「尾崎喜八資料」第3号でお知らせしたが、尾崎喜八・水野実子の結婚の祝いに高村氏から贈られたものである。今回尾崎家蔵のその母子像を展覧会の為に借り出したいと依頼があったので承諾した。美術館の展示期間は左記の通り。

呉市立美術館　4月14日―5月13日
三重県立美術館　5月19日―6月17日
茨城県近代美術館　6月23日―7月22日

●昨年「尾崎喜八資料」5号を送付する際に尾崎自筆半折の石版刷り復刻「懸巣」の予約注文を承ったが、実に九十五名の方が予約をして下さった。その数に従って百部限定とし、五月中に発送を終えた。百部の別に番外を刷り、鎌倉文学館・追分宿郷土館のように尾崎の展示コーナーのある所、霧ヶ峰のヒュッテ・ジャヴェル、上高地の五千尺旅館、信濃追分の本陣旅館等尾崎にゆかりがあり、研究会の一種の根拠地となる所に寄贈した。

●尾崎が旅先の宿で色紙に揮毫を頼まれた際の短歌・俳句には、その土地その宿に対する思い入れのものが多いように見受けられるが、その実体は殆んど分っていない。信濃川上の奥、梓山白木屋旅館の　山深み夏また深む梓山　なつかしきかな水も故旧も（色紙現存）、群馬県神流川沿いの万場町今井屋旅館の　父不見御荷鉾も見えず神流川　星ばかりなる万場の泊り（色紙不明）、は著書の中に書かれているが、会員の情報で分ったものに、西穂山荘　酒食せば村上の大人尾根翔くる　雷鳥に似し声も出すかな（山崎光雄氏調べ・写真撮影）、信州別所温泉柏屋別荘　この里に池あまたある露けさよ（後藤敏氏調べ）、木曽の蕎麦屋さんに梓川の詩、上高地駐車場にあるパネルの詩と同じもの（石川翠さん調べ）があるという。別所温泉柏屋別荘蔵については、後藤氏が更に詳しいいきさつを書簡で当主に尋ねられた所、昭和三十六年塩田中学校校歌の発表会の時に、作曲をされた團伊玖磨氏と尾崎が泊った折、色紙の揮毫を頼んだとの事で、当主斎藤三雄氏の返信には、宿に着いてからの團氏・尾崎の様子が書かれており、俳句の句意として「大小、百余あります塩田平の貯水池の様子をおよみになったものです。全国的に雨量の少ないこの地は、上田藩二代の仙石氏の頃造りました池で、現在は鯉の養殖をいたして居ります」との丁寧な手紙を後藤氏から拝見させていただいた。木曽奈良井の越後屋旅館にも色紙がかけてあるそうだが、まだ見る機会がない。どなたか越後屋に泊られる機会があったら、詞を写して来てお報せいただければ大変ありがたい。

●平成元年十一月十八日刊行の『長野県文学全集』（第Ⅱ期随筆・紀行・日記編〈郷土出版社〉）に尾崎の随筆が収録されている。5巻に「初めに驚きありき」「たてしなの歌」、7巻に「雲に寄せることづて」「湖畔の町の半日」「冠着」、8巻に「霧ヶ峰紀行」である。

（尾崎栄子記）

この一年のできごと

二月四日、生前親交のあった方々によって、蠟梅忌第十五回が北鎌倉の「門前」で行われた。長野県諏訪郡富士見町に設立予定の（仮称）尾崎喜八記念館の現在時点の説明がなされ、町教育委員会教育次長植松氏の挨拶があった。参加者は会の前後に明月院にある尾崎の墓に詣でられた。参加者七十五名。

五月二十六日―二十八日、上高地五千尺ロッヂに於て「みずならの会」開催、好天に恵まれ、昼間は鳥・植物を小宮静雄・島正孝・西村豊氏の指導のもとに観察し、三宅修氏に写真の指導を受けつつ田代池・明神・徳沢方面への散策を行う。夜は尾崎出演のビデオを見たり懇談をする。参加者延五十一名。（右の自然・文学・音楽の小ゼミナール「みずならの会」については、「尾崎喜八資料」4号発送時にこのような会への参加希望者を募り、その名簿を元に案内を発送している。希望者は百二十名であった。）

六月二十四日、長野県南安曇郡穂高町中学校同窓会主催で「田舎のモーツァルト」碑の碑前の集い。雨中、穂高中学校生徒により、モーツァルトの「聖なるお体」合唱、主催者より期日の知らせが遅れたため、会員に連絡がとれず、出席は当会より尾崎栄子他二名であったが、地元の同窓会会員、教職員の出席があった。

八月二十七日、長野県諏訪郡富士見町にて「富士見に生きて」碑の碑前の集い十周年が富士見尾崎会主催で行われた。生憎の颱風の影響で東京から当日参加の方々約二十名は中央線不通の為長時間車中に閉じ込められ、遂に引き返されるという憂目に会われた。豪雨の為、会は中学校体育館で行われ、富士見小学校校長・富士見町教育委員長・公民館長のお話、三氏とも若き日に尾崎の講演をきいたり、分水荘を訪ねたりした方々であった。小学生による富士見小学校校歌合唱、この校歌は昭和四十七年秋作られたもので、尾崎が最後に手がけた校歌であった。席を移して懇親会。参加者約八十名。

十月二十八日―二十九日、群馬県多野郡万場町西御荷鉾山の文学碑建立十周年、尾崎家及び永友会主催。好天・温暖・紅葉に恵まれ、美しい一日であった。参加者三十七名。

十二月三日、メンネルコール広友会第八回定期演奏会に於て、多田武彦氏作曲の尾崎喜八の詩五篇からなる男声合唱組曲『樅の樹の歌』の初演が東京都中央区立中央会館にて行われた。

編集室から

■とうとう二〇世紀も、今年から最後の一〇年間に入ります。そして一九九二年――再来年は、尾崎喜八の生誕一〇〇年目にあたります。『資料』の着実な歩み、富士見町の記念館建設の機運など、さまざまな動きがこの時期に起こっていることを喜び、また、この機会を逸しないで、尾崎喜八研究の基盤を整える努力を怠らないようにしていきたいと思います。記念館の進行については、欄を設けて、逐次、ご報告していくようにいたします。

■今号では、喜八の音楽に関するエッセイの落ち穂ひろいをしてみました。そうしてみると、単行本未収録の音楽関係エッセイが案外少ないことが分かりました。他にも、レコードの解説などで、当方の探索にかからないものがあるのではないかと気になっております。何かお気付きのことがありましたら、是非研究会までご一報ください。

■次号からは、伊藤海彦氏の喜八の仕事についての連載が始まります。どうかご期待ください。また、「研究と資料」に掲載する文章の方も、これまでの「山」「自然」「音楽」といった喜八の主軸となった仕事中心の構成とは一味ちがった形での集めかたをしてみたいと思います。たとえば写真について書かれたものなどは、まだ触れられていないものが多いと思います。

（90年1月5日　石黒敦彦記）

尾崎喜八資料・第六号
一九九〇年二月四日発行・非売品
ISSN 0911-3339
発行・尾崎喜八研究会
鎌倉市山ノ内一九七―五一（〒247）
電話〇四六七（二三）一七六一
振替　横浜7-33012尾崎喜八研究会
印刷・住友出版印刷